檸檬的空模様

岩崎星空羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
檸檬的空模様

【Ｎコード】
Ｎ７４６３Ｄ

【作者名】
岩崎星空羅

【あらすじ】
メインは、ＦＦ。その他は、短編で投稿してます☆基本コメディーで行きたいと思いますッ！

疑心暗鬼編

後戻りなんて出来ないよ。
この手を取った瞬間、あなたは『無』となる――――――――――。

手を差し伸べてるものの言う事など…信じられない。
全て、全て――――――――――あなたを束縛していた者をお掃除してあげるから…。
差し伸べている手を…避けないで――――――――――。
なんで…？そんなことを言うの…――――？

初めまして。
父の転勤で、引っ越してきたこの場所…。
編入した学校は…新しい学校だ。もう既に一ヶ月たっているから一応慣れてきた。
仲がいい、といわれる友達も出来た。
まだ、真友っていうところ。
道中由依、川岸空羅っていう友達。私――――――――――…遠畑亜里紗。
この３人で行動する事が多い。何でも話せる…仲良し。
でも、元々は由依と空羅が一緒にいて、私が転校してきたことでその均衡が崩れたんだ。
多分、でもこの二人は本当の心友。私に気を使ってくれているってことは分かっている。

それに――――――――――――この二人は、影で私の悪口を言っているということも…。
証拠はない。でも、絶対に…。

◇
学校が終わる。
私は、部活があるという由依と別れ空羅が替える準備をしているところへいく。
「空羅ー♪」
私がそういうと、空羅はビクッと体を振るわせる。
「部活？一緒に帰らない？」
そういうと、空羅は首を横に振る。
「ゴメンね。今日私ピアノがあるから…。」
そういってかばんを取る。
私はかばんを取って教室を出ようとする空羅の手首をつかむ。
「待って！駅まで…。」
私の言葉は、空羅の言葉によって最後まで言う事が出来なかった。
「ゴメン。急いでるから！！！！」
そういって、私の手を振り切って小走りして教室を出た。
ドアがバンっという大きな音を立ててしまった。
仕方なく私は時間を置いて、一人で帰った。

◇空羅◇
危なかった～。
明日は、亜里紗の誕生日♪プレゼントを買いたいのに、亜里紗にばれたら、由依と考えた作戦が台無しになったう！
亜里紗をビックリさせたいのに、買うところとかバレたらいやだも

んねっ♪
だから…ちょっとキツいことといって振り切ってきちゃった…。
傷ついてなきゃよかったけど…。
だって、私の一番の親友だもん♪亜里紗がそう思ってなくても…私はそう思ってるもん♪

◇

家に帰ると、制服から私服にも気がえずにベッドへ寝転ぶ。
――――――――――――――イヤだな…。ついに、陰口から行動に出たんだ…。
涙が頬を伝う。
――――――――――引越しなんてしたくなかったな…。
枕が涙で濡れる。
そのとき…メールの着信音がなる。
ディスプレイを見ると、
『空羅』の文字――――――――――――――――――――――――――――――――…。
私はその文字を見た瞬間、怒りと恐怖がこみ上げてくる。
でも…1秒、1秒と時間がたつたびに、怒りがこみ上げてくる。

キライナラシンデシマエ

その言葉がネオンライトになって脳内を駆け巡る。
殺すなんていやだって思うと、
『このまま苦しみ続けるのか――――――――――――?』って頭の中で点呼する。
苦しみ続けるのもイヤだよ…。

どうすればいいの――――――――――――――…？誰か…誰か私を助けてよ。

――――――――――亜里紗が本当に…本当に困ったらコレを。

そういって祖父が渡したのは大きなキリの箱だった。
まだ見ていない。
多分、今コレをあけるときがきたのかもしれない。
私はそっと、その箱が閉まっている秘密の場所へ足を運ぶ。少し埃をかぶっていたからそれをはたく。
とても大きい…。
そっとあけると蓋の裏側に貼り付けてあった手紙――――――。
貼り付けてあった粘着テープは、黄ばんでいた。
その手紙をそっと見る。

『この手紙を見た時、亜里紗は死と生の境をさまよっているんだと思う。だから、人をあやめぬようにコレを使うんだ。』
殺めぬよう――――――――――――…。
その響きが怖い…。
私はそんな人を殺めることなんて出来るわけないじゃない…。おじいちゃん…。
私はそういって、新聞紙をどけて中に入ってるものを見る。
そこにあったのは、

――――――――――大鎌…。

血の気が引いた。
もっと見ると、案外重かったけど余裕で持てる。
大きいから素振りすることが出来ないけど…。脅す事くらいならで

きる…よね？
携帯電話を制服のポケットに入れる。
そして、鎌を新聞紙に包み二階にある私の部屋の窓から庭に落とす。
鈍い音がして下に落ちる。
私自身は、階段を駆け下りる。
親には、遊びに行く、といって家を出た。庭に出て鎌を取る。
人通りが少なく、外灯が少ないこの町の利点ね――――――――――――――。

「はは…。。はははは…。」

私は、ゆっくりと空羅の家へと足を向かわせていた。

◇空羅◇

私は、買った誕生日プレゼントを満足そうに見ていた。
「絶対コレ、亜里紗気に入るなぁ～♪」
親がいないから、いつもは制限されている携帯電話でメールすることも今日は好きなだけできる♪
由依と一緒に、さっきから亜里紗の誕生日のコトを話している。

「～♪」
由依からメールではなく、電話が来る、携帯に。
「由ー依～♪」
私が出ると、由依も同じように私の名前を呼ぶ。
「あのさ、明日のパーティーな…」

ピーンポーン

由依が言葉を言い終わる前に、チャイムが鳴る。
誰かな…。セールスマンだったりしたらいやだな。携帯をそのまま手に持ち、ドアを開ける。
「川岸ですけど～？」
そういってドアを開けると、亜里紗が立っていた。
携帯から由依の声がした。
『早く～？どうしたの～？』――――――――――と。

◇

目の前にいる空羅は、にっこり笑っている。
何。何でそんな顔をするの？まるで、本性を隠すように――――――――。
「こんばんは♪」
愛想良く挨拶する。相手もにっこり笑う。
「ねぇ。こんなものは好きかしら…？」
そういって背後に隠し持っていた大鎌を見せる。
その瞬間、空羅が携帯電話に小さくつぶやく。
「何…。誰に電話してるの。」
そういって、鎌を首元へ近づける。それにやっと自分の立場を認識したのか空羅が携帯を落とす。
「由…依…。」
その瞬間私は私の意志とは別に、鎌を振るう。
血がとんだ。
「ふふ…。」
そういって、私は由依の家へ急いだ。

◇

空羅から聞いたあの話。
『…亜里紗から逃げて…。』
アレは何？とにかく私は逃げなきゃ！家にいたら…殺られるよ…。
近くにあった森林に逃げ込む。
息を整える。
少ししたらまた逃げなきゃ…。
「見ぃ～つけたぁ～♪」
背後に殺気がした。振り返ることは出来ない。
私は、走ろうとした。すると目の前に鎌の先端を向けられる。
「逃げられると思った？」
横に振る。
「私を嫌おうなんて…バカげたこと考えて…。」
嫌う！？
「そんなことない！！被害妄想…いや、疑心暗鬼にかかってるわ！」
そういっても…亜里紗は信じようとしない。余計、鎌を近づけてくる。のどまであと５ｃｍ程度。
「かかってない…。バカバカバカ…。」
ぐさりといった音がする。

さようなら、由依、空羅

人間失格編（前書き）

初の恋愛物です。
書いてて恥ずかしくなりました…。

人間失格編

さぁ。
史上最高、最大のゲームを始めましょうか。
参加者は、この国全員。
優勝賞金は、この国のお金をすべて。
ルール？ルールは簡単。
私――――――――――主催関係者以外を全員殺せば優勝。ルールは、ない。
好きなことで殺っちゃって。
じゃあ、
ゲームスタート――。

王様からじきじきに発布されたその手紙を見た沢平里奈は家のポストを疑う。
もし、これがいたずらとかじゃなくて本当に王様から発布されたものなら、今すぐ逃げなきゃいけない。
それに、自分以外が全員敵。
家族が私を殺すはずがない。それにこの手紙を見せなきゃ平気だよ

ね。でも、見せなきゃ命が危ないし…。
それに、この怖い殺人ゲームが開始されるのは、明日の午前４時４４分からだし…。
もし、本当だったら…怖い。でも、今はゲーム始まってないし今人を殺したら罰せられるから、とりあえず隣の家に聞いてみた。

ピーンポーン

「あら。里奈ちゃん。朝早いのね。」
「おはようございます。あの…この王様からの…。」
そういって私は手に持っていた手紙を見せる。
するとオバサンは、困ったように手を頭に当てて、
「それねぇ。本当見たよ～。怖いわね～。」
「え？本当なんですか！？」
そう聞く私は、声が震えていた。
「そうらしいわ～。いたずらだったらこの近辺だけでしょう？あの、シャリ地域まで発布されていたってことは…王様じきじきの手紙よ。」
それだけいうとオバサンは家に入っていった。
確かにシャリ地域まで発布されたなどと言ったらいたずらじゃない。
確かに王様からのありがたきお手紙だ。
私は急いで家い入った。
「菜由ー！！！」
私は菜由を探す。
菜由は、共同の子ども部屋で雑誌を読んでいたため私が呼ぶと、億劫そうに答えた。
「何？」
その声は不機嫌でちょっとびっくりする。
「雑誌を読んでる場合じゃない！早く着なさいよ！」
「お姉ちゃん…。彼氏でもできたから？」

そういいながらもベッドから体を起こす菜由。でも手にはちゃっかり雑誌。
「コレ見なさい！」
私は王様から来た手紙を菜由に見せた。
すると、本当にドラマとかにあるように、菜由は手に持っていた雑誌を床にパサリと落とした。
「こ、こ、これ本当なの！？殺し合い！？イヤだよ…イヤだよ…。」
「これ本当みたいなの。菜、菜由は私のこと殺さないよね？よねッ？」
私が言うと菜由の返事はなかった。
「ココで私が頷けば、負けじゃない…。」
――――――――――――え？
「菜由は私を殺す気ッ！？」
そういうと私はいつの間にか、菜由の首を絞めていた。
「痛…痛よ…お姉ちゃ…。」
衝動的に首を絞めていたのに気が付き私は手を離す。
息を整える菜由。
「ほら。お姉ちゃんもいざとなったら殺そうとしてるじゃない。私は極力お姉ちゃんと会わないように、これをお母様たちに渡した後遠い国へ旅立つ。」
そういってすぐに子ども部屋を出て行ってしまった。

「バイバイ、お姉ちゃん。」
菜由の目にはうっすら涙が見えていた。

――――――――――――どうしようか。
私は特に武器といえるものを所持していない。それにこの国は、銃

が使われていない。
でも、銃を使う人もいるよね。
私は銃弾チョッキを羽織う。
そして、ジーンズのポケットにいつものスタンガンを入れる。
多分、家にある包丁は母が所持するだろう…。
私は制限時間までに間に合うように、急いでショッピングセンターへ急いだ。

ショッピングセンターは一見ガラリとしていた。
しかし、文房具屋などはさみなどの凶器が売られている店からは人があふれていた。
一か八か――――――――――。
私はとある裏ショップへと足を進めた。

私が知り合いから教えてもらった裏ショップは人がいなかった。
いつものように、マスターがカクテルを作っていた。
「おう。里奈ちゃんも凶器かい？」
そういって怪しげににやりと笑うマスター。私は、にこっり笑っていった。
「モチロン。拳銃はある？」
そう聞くとマスターは、
「あることはあるんだがなぁ…。コレにつける弾丸が中に入ってる分しかないんだよ。」
そういう。仕方ない…。
「それもらうわ！生き残ってたらこの国のお金を半分で分けましょ！それから、できれば包丁みたいな刃物がほしいんだけど…。」
マスターから手渡された拳銃を内ポケットへと収納する。とにかく時間がない。
「おしッ。これでどうだい？」
そういって取り出したのは結構大きな鎌だった。

「これ家に持って帰れないじゃん！」
そういうとにやりと笑ったマスターは言う。
「まぁまぁ。威嚇になるじゃん。俺の車で送っていくよ家までさ。」
そういってマスターは車に鎌をつんだ。私も一緒に車に乗る。
車が動いてるときに私は聞いた。
「ねぇ。マスターは私のこと攻撃する？」
そういうと、彼は首を振った。
「里奈ちゃんは怖いからね。攻撃できないよ。」
そういってハハと笑っていた。
よし…。これでなんだか安心した。
「ついたぞ。お互い生き残ろうな。」
そういって家の中に鎌を運んだ。

私はマスターと分かれた後、腹持ちがいい食料をとにかくバッグへ詰め込む。
あまり大きいと逃げるとき苦労するだろうと思い、小さな肩掛けバッグにする。
チョコレートや一口ケーキをとにかく詰め込む。
これは腹持ちがいい…。
私は置手紙を書いて飛行場へ向かった。
シャリ地域までのお金はないけれど…。ジュソウ地域まではいける！
私は飛行場まで一生懸命自転車をこいだ。

ピーンポンパンポーン

飛行場特有のあの音楽が流れる。
いつもなら、

『あぁ！旅行へ行くんだな！』
っていう気分になるんだけど今は違う。
『もう私がルラァ地域に戻ってきたときには、ココは今までのルラァ地域じゃないんだな…。』
っていう気分だ。
本当に、ココは死体で埋め尽くされるのかもしれない。頑張らなきゃ。私はその一身で、チケット売り場へ並んでいた。

『まもなく、４５５便が～』

やっと手にしたジュソウ地域のチケット。エコノミーはもう売り切れ。仕方なくビジネス地域を買った。
もう残金はないに等しくなっていた。生き残るためだから仕方ない。
隣に座っている綺麗なお姉さんも小さなポシェットだけだった。それに、飛行機に乗っている間みんな出てくるおつまみなんかも全部鞄に詰め込んでいた。
やっぱり…。本気なんだな、王様は――――――――――――。
つくづく王様の考えていることが分からなくなる。王様は、優しい。税金を下げてくれたりする優しい王様。でもちょっと変なんだってことを改めて知る。

現地へ付くと、真夏らしいむわぁんとした空気が私を迎えてくれた。
プールで泳いで菜由と一緒にビーチバレーしたかったな――――――――――――――――――――――――――――。
私は今となってはかなえられないはかない夢を夢見ていた。
もう航空から何分歩いただろう。
最初はすずめの涙ほどしかない金を出してタクシーに乗って遠い密

林まで連れて行ってもらった。
そう。今私がいるのは密林だ。
時計を見るともう王様が言う『ゲーム』が始まるまで時間まで後1時間弱。
お母さん、菜由、お父さん…それからお兄ちゃんも無事でいてくれるかな…。
私は密林を音を立てぬように進む。靴には、綿が敷き詰められているため足音が吸収されている。とても暑苦しいけど。
時々狼が遠吠えを立てるため食われるんじゃないかと怖くなる。
私の右手にはすでに大鎌。
すでにそのズンと来る大鎌にも慣れてしまった。何度か密林で素振りするとドスンという大きな音をお立てて木が何本か倒れた。
うん。
すごい威力。私にふさわしい！
私はとにかく深く、深く進んでいった。

カチリ

小さく、でも大きく時計の針の音がする。
そして、大きな鐘の音がした。密林でも聞こえる、その音は、王様が家来に命じたのだろう。
私の中で王様が、
「ゲームスタート――――――――――――」
って言ってる。
さぁ、はじめましょうか。

「やめろ！！やめろ！来るなー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

中年ぐらいの男が叫ぶ。

「あら。私何もしていませんわよ？」

「ゲームだろ！！！！！！俺を殺すなー！」

ゲームのルールは、ないってことを忘れちゃったみたい。

「哀れな人…。」

そういって私は彼の首を刈った。

また、血が私の衣服にかかる。さっきまで着ていた、白地のジャケットが真っ赤に染まっていた。

「ごめんなさいねぇ。生きるためには殺るしかないのよ。」

そういって私は次の獲物を刈りにゆく。

逃げまとう人々を追うのは楽しい。

そのとき、聞こえてきた――――――――――――王様の声。

「残り３人。ジュソウ地域に固まっている。名前を挙げる。」

――――――――――え？もう３人。

「殺している順番から言う。沢平里奈。金時雷。沢平菜由。」

菜――――――――由――――――――――？

菜由は殺せない。

今は金時を殺す。この地域にいるんだ。探せ。背後も気をつけてなきゃいけない。

精神がぼろぼろだ。

４時間歩き続けた。

そして…密林のほうからガサリといったとても小さな音がする。そこを見ると、人影があった。

私は勢いよく密林へと入っていった。

しばらく走ると、その人影を見つけた。だんだん近づく。菜由も生き残っているから簡単に鎌を振り下ろすわけには行かない。

相手との差が１ｍになった。

さすがに私に気が付いたのか人影が振り返る。
そこにいたのは――――――――――金時雷と言う男だった。
「血まみれなんだな、里奈ちゃんは。」
年は同じぐらいだろうか。こっちへと近づいてくる。
私は鎌を構える。彼はそれにビビらずに距離を近づけてくる。
「来るな！寄るな！それ以上近づくと首を刈るぞ！！！！！！！！！」
そういうと彼は悲しそうに笑う。
「…俺のこと覚えてないんだ。菜由ちゃんは死んでるよ。」
最初の言葉に引っかかったがそれ以上だ。
菜由が死んでいる？
「菜由は死んだの？」
私は幼すぎる言葉が口から発せられたのに驚く。
「あぁ。さっき殺されていた。死んだ振りする奴もいるらしいがもういない。王様の家来がじきじきに殺すからな。」
私は鎌にぎゅっと力を入れる。こいつを殺らなきゃ…。決め手が必要だから待つ。
でも意外に私は彼の話に釘付けになっていた。
「――――――――――本題俺のこと覚えてる？」
「知らない。」
即答なのでビックリしたのか、それとも私の言い方があまりにも冷たかったからなのかは知らないが彼は悲しそうに微笑んだ。
「そっか…。じゃあ、これは？」
そういって彼はポケットの中で何かを探している。
私は隙を作った彼を見て絶好のチャンスだと思い鎌を振りかぶる。
でも、振りかぶるだけだった。彼が私に見せたもの――――――――――。それは…。
「婚姻届――――――――――。」
「思い出してくれた？」
初恋の相手。そのとき苗字は、市川だったから気が付かなかった。
すごい仲良しで、私が言った一言。

『結婚しよーね？』
そういって、二人で大学ノートの一ページを小さく切って相合傘に二人の名前を書いた。でも、雷はお母さんの再婚で転校――――――――――――。
「…雷君は元気だった？」
彼は軽く頷く。
「里奈ちゃんは、生き残りたい？」
生き残りたくない人なんていないじゃん。
「モチロン！」
「じゃあ俺殺してよ。」
――――――――――――ジャアオレコロシテヨ
その言葉が頭の中でこだまする。
「何言ってるか分かってるの！？」
私がそういうと彼はにこりと笑って頷く。
「里奈ちゃんに会って伝えたかったんだ。だから殺して。里奈ちゃんに殺されるんだったら本望だよ。」
「雷君っていつもバカだよね。ほら、行くよッ！」
私はおもむろに彼の手を取って走った。

「王様。」
私と雷君は今城に来ている。
「どっちが勝ったんだね？」
王様はそう聞いた。
私たち二人はいっせいに伏せていた顔を上げた。その様子に驚く王様。
「お前たち…。二人とも生きていたのか！」

私たちは軽くお辞儀した。
「…賞金はどちらかが死ぬまで渡さぬぞ！」
予測できてるよ。そんなの。
私たちは二人して顔を見合わせてにこりと微笑む。
「もう、ココの国の住人で主催関係者以外で生き残っているのは私たち二人です。」
「だから、一人に絞ってこいといっているんだ！」
「俺は、沢平里奈を殺しません。」
「私も、金時雷を殺しません。」
それを聞いて王様は目を丸くした。
でもそれは一瞬で終わった。その後本当に和む笑いをした。
「分かってくれたんだね。二人は。本当のゲームの意味を。」
王様は話してくださった。
本当のゲームの意味は、国民が本当に他人を信用できるか、ということを知りたかった。何をおきぬことを祈っていた。
「じゃあ、私の負けだ。私たち主催関係者を殺して、キミたち二人だけでこの国――――――――――ラズリ王国を作ってくれないか。お願いだ、
いや、王様の命令だ！！！！！！！！」
王様が手に持っていた、ベルをチリンと鳴らす。
収集される家来。
そして一列になってその軍団は王様を先頭に城の外へ出た。
「殺せ。」
私は一人ずつ『痛いのと、痛くないのどっちがいいですか？』と質問しながら鎌で首を刈っていった。

「職務ご苦労様。」
そういって私の頭をなでてくれた雷君に今更ながらドキッってする。
「――――――――――今ならいい？」

彼はそっと耳元で囁く。なんだかくすぐったい。
こくんと頷くと彼はにっこり笑った。
「好きだよ。」

血にまみれた私の洋服はなんだかピンクに染まっていた。

「私も、大ー好きだよッ！」

人間失格編（後書き）

この二人は新しい国を作って、末永く…一緒にいることでしょう

比翼連理編（前書き）

初めてのＦＦです。
学園アリスのキャラがバンバン出てきますよ

比翼連理編

「これで契約完了。」
「あぁ。そうだな。」
「じゃあヨロシク頼む。」
「自ら我名を汚す大馬鹿はいない。俺に任せろ。」
ココに一つの死の契約が誕生した――――――――――――。

「檸檬!!!!!!!!!!!」
「ちょっと待ってー!!!!瑠璃!」
檸檬――――――――と呼ばれたその子の名前を呼ぶと死ぬ。
過去にこの学校の先生が殺戮された。
だから、みんなからあだ名を付けられた――――――――――
―檸檬という、あだ名を。
瑠璃…と呼ばれた子は差川瑠璃。
檸檬と同い年の中3。瑠璃も檸檬も成績優秀。優等賞争いを行っているという現状もある。

「岬先生っ♪」
檸檬がプリントを私に教員室へ向かう。
「檸檬…。お前…優等生のクセに遅れて提出プリント出すのおかしいだろ。」
そういって檸檬の持っているプリントを取る。
檸檬だってちゃんと提出日にプリントを持ってきている。
でも、岬先生が好きな檸檬はわざわざ毎日持っていってるのだ。
岬と一対一で話せる事に幸せを感じている檸檬。
「お前さ、俺の授業のときだけ忘れるだろ、提出プリント。」
「えへへ～♪何でだろうね、ねっ」

はぁ…

と岬がため息をつける。
檸檬がその横でくすくす笑う。
「そろそろ予鈴がなる、いけ。」
その声に不機嫌そうな檸檬の声が返ってくる。
「つまんないのぉ～」
「仕方ないだろ、クラスにもどれ！」
「はぁい」
そういってしぶしぶクラスに戻る檸檬。笑顔で見届ける岬。
「檸檬…。」
岬はチャイムがなった後小さく名前をつぶやいた。
――――――――――――――――あいつは全てを知っているんじゃないか…。
最近教師が死ぬ事件が多い。
その犯人はアリスは使っていない。
ただ普通に殺人マジックを繰り返す、怪盗が夜毎現れて一人ずつ消

し去って言っているのだ。
その怪盗……。
モノクルをかけて、シルクハットをかぶった、白を基調とした格好で現れるその怪盗は某アニメに出てくる怪盗そっくりだが身長が全然違う。
確実に、２０ｃｍは違うだろう。
ただ飛ぶ際に、
「Ａｄｉｏｓ！」
というと同時にウインクをして飛び立つキザな奴。
マジックをこなすが、知っている限りでは殺人マジック全般担当。
盗むものは、小５の女の子、中２の女子。
一夜にして、教師１人を殺して、女子１人を行方不明にさせる謎の怪盗。
とある人の情報によれば、それは祟りを沈めるためのいけにえだ。
小５のとある男子が心を読んだ結果、『怪盗Ｐ』と言うらしい。
この学校にいる中２男子にはまってるとかなんとか…。
Ｓ女学院に通うという情報もあるが、他にもＥ男子校に通っているというううわさもあるらしい。
素性がよく分からぬ怪盗Ｐ。
そいつの事を知っているのは、名前すら他人に教えない秘密主義の檸檬じゃないか――――――――――――――――――――。
岬は少し疑っていた。

◇

教師がほとんど消えた。
岬は自分が襲われるのじゃないかと、日々心配していた。
そのとき毎日来てる檸檬に少し好意を抱いている自分が少し気に入らない。

「…い？せんせっ？先生っ？」
檸檬がプリントで岬の頬をつつく。
「あ――――檸檬。」
「ん？何ですか、先生っ♪」
檸檬は岬に名前を呼ばれて内心浮かれる。
「生徒にこんな事を言うのもなんだが…怪盗Ｐの…。」
そこまでいうと檸檬は声を落として言う。
「あぁ…。Ｐｉｎｅａｐｐｌｅのことか…。」
――――――――――パ、パイナップル！？
岬は心の中で叫ぶ。
そうか…。
怪盗Ｐ…怪盗Ｐｉｎｅａｐｐｌｅ…そうか、略されていたのか。
「彼は余り知られていないよ、分からない。私にも何も…。」
くぐもった顔の檸檬。
それだけ言うとペコリとお辞儀をして檸檬は教員室を出た。

――――どうして、岬先生はＰｉｎｅａｐｐｌｅのことを知っているのだろう。
檸檬は自室へ帰る途中に考える。
でもそれはどうでもいいことだった。
Ｐに狙われる――――。
それだけが心配で心配でたまらなかった。
――――――――私が守らなくちゃっ！！！！！！！
檸檬は決意を固めた。

◇夜

ガサ…

小さな木の葉が風に揺れる音で不意に岬は起きた。
目を擦って窓の方へ目を向けた――――――――――。
「お、てめ…。」
急に口をふさがれた。
目の前にいたのは、例の怪盗Ｐｉｎｅａｐｐｌｅと思われる…人物。
「しゃべるな！」
小さな声で彼は言う。
いや、彼じゃない、彼女だ。
中１，２くらいの小さな女の子。純白手袋が俺の口をふさいでいる。
「やめて！！！！！！！！！！！！！！」
「へ、ほん！！！！」
岬自身は、『檸檬』と叫んだつもりなのだが口をふさがれているため上手く伝わらない。
「もう先生を離してあげて…。」
頭を抱えてＰに向かって叫ぶ檸檬。
「あら、契約人。」
ニコリと小さく笑うＰ。
「先生を放して…。」
それだけ聞くとＰはフッと笑ってから岬を離す。
息を整える岬。
すると、その瞬間Ｐの手が動く。
その手の中からはトランプが見える。
岬に駆け寄ろうとした檸檬の動きをトランプが許さなかった。
あと少しで檸檬にあたるというところで、トランプがパサリと落ちる。
冷や汗を流す檸檬。
「俺に勝てるとでも思いました？」
檸檬はその飛んできたトランプを拾う。
スペードの１――――――――――――――――。

以前にPと話したときに言ってたことが脳裏をよぎる。
スペードのカードの意味は…
『死』――――――――――――。
私に対してじゃない、契約をしたのは私だからだ。
み、岬先生っ！！！！！！！！先生が危ない！
既にPは殺人マジックのネタを用意していた。
「ダメっ、ダメ！！！！！」
私は叫ぶ、Pはこっちを見ぬまま言う。
「なぜだ…。」
「理由はいえない！殺人マジックやれば？もしやったとしたら翼せんぱ…。」
「……最悪。」
その言葉をつぶやいたときにはPは既に窓に近づいていた。
檸檬は余りのことに驚いて呆然としている岬の所へ走り寄る。
「ねぇ、契約解消は？」
檸檬が小さくつぶやいた。
「ちょっと先輩…それはなし。俺、生計立てられないし。」
その答えにうなずきつつあきれてPを見る檸檬。
「あのさ、そろそろその男口調やめなよ。だから男だと勘違いされるんだよ？」
「…フッ。」
「翼先パイに言ってやる！」
その言葉に即座にPが動揺する。
「……せめて先輩だけは男としても認めてくれるか？」
「もろ、女じゃん。声の高さとかさ。」
そう言った後に岬が起きる。
「…檸檬…。」
「先生♪Pって実は翼先輩がすきなんだよ～♪」
それにかなり動揺するP。
「…へ～。檸檬ってすごい情報網なんだな。」

そういって腕を組んで考える岬。
「そうか…安藤と…。」
中２男子にはまってるっていう情報はこれだったのか…。
岬がそれを言ったときには、Ｐの姿は既になかった。
Ｐがいた場所にあったものは、ただ一つの青い鳥の羽だった。
Ｐが何かを盗んだときにおいておく羽根だ。
「バイバイ…。」
窓を見て檸檬が言う。

「…ぎりぎりセーフ。」
Ｐは夜をハンググライダーで切り裂きながらつぶやいた。
「あの、お嬢様も大変だな。檸檬先輩♪」
Ｐが呟いたときに、一通のメールが来た。部活の友達からだった。
『部活の先輩から呼び出しのメールがきたッ！！助けて！明日一緒に呼び出し場所行こうね！』
それを見たＰはもはや、怪盗ではなく、ただの学生に戻っていた。
深いため息をついたＰは、檸檬に向かって言う。
「Ａｄｉｏｓ」

比翼連理編（後書き）

Pが盗んだものは
秘密です♪

勇往邁進編

「瑠菜早く～！！！」
美王の言葉でいやでも急かされる。
私はできる限りのスピードで瑠菜のところに走る。
目標の美王が急に叫ぶ。
「後ろッ――――――――――！！！！！！！！！ふせて！！」
その声で私はクルリと後ろを向いた。
後ろにいたのは――――――――――……自動車だった。

体が宙に舞った。

すごい地面に体が付いたときにものすごい衝撃が走る。
痛い…という言葉じゃ表せない。
本気で『死』を意識した。
ドライバーらしき人が携帯電話を取り出して救急車を呼んでいるのだろうか。
美王が駆け寄ってくる。
「瑠菜！瑠菜！」
すでに半目だったと思う。
美王は私の手を取った。
かすかに見えた私の手は、肌色が見当たらず濃い赤で染まっていた。
時折足に冷たい雫が落ちる。
「死なないで！！！」
私はその声を聞いてから、頷こうとしたところで意識を失った――
――――――――――…。

◇

私が目を開けると、前には１６歳くらいの女の子がなみだ目でこちらを見ていた。
いったい誰だろう――――――――――？
私が凝視していると彼女はその様子に気づいたらしくて私の手をおもむろに握る。
「瑠菜！！思い出したのッ？」
彼女は、私のことを『るな』と呼んだ。
私の名前は、るななの？
でも、彼女が私のことを知っている時点で私の知り合いである。で、私が知らないということは記憶障害だろうか。
自分が何で記憶喪失になったのか分からない。
相手を傷つけぬように言葉を慎重に選んで言う。
「……私の知り合いですよね？」
私がそういうと彼女は表情を凍りつかせた。
そして、彼女は私がいるであろう部屋を後にした。
彼女が部屋から出ると私は体を起こして部屋全体を見渡した。
右には机の上にフルーツバスケットがおいてあった。
小さくカードが入っていたから、私はそのカードを取り出す。

『瑠菜へ。
美王だよ！！！怪我大丈夫？毎日、学校終わったら病院来るから！
私の責任だしね…。
早く元気になぁれ！

美王』

美王さんがくれたんだ……。
それで、さっきの子がいってた『るな』という私の名前らしき名前は瑠菜って書くんだ。
何でだろう。
人の名前とか全然覚えていない。
ココは病院なんだ。さっきの手紙にも記してあった。確かにここは白を基調としている部屋だ。
私が部屋を見渡していると医者らしき人と看護婦と、さっきの子と３０代くらいの人が部屋に入ってきた。
「……瑠菜さん！」
医者らしき人は私に向かって大声を上げる。
「……はい？」
私は自分が瑠菜だという確証がないので語尾に疑問形をつけて答える。
すると医者は隣にいる３０代くらいの人を名指しして言う。
「この方が誰だかわかりますか？」
「いえ……。全く分かりません。」
私がそう答えると女の人は驚いた顔をした。
するといきなり医者は自分の白衣のポケットに入れてあったボールペンを私に持たせる。
「これの芯を出してください。」
私はこのペンの胴体を回す。
芯が出た。
そしてそれを医者に渡す。

さっきの女の人の耳元で何かを話している様子。
目の前でそんなことをされると気分が悪い。
私が睨むと看護婦さんがそっと私の耳で囁く。
「大丈夫。アナタの病気は必ず治りますよ。」
フフ、と笑って看護婦は病室を出て行った。

それに続くように、医者と女の人が出て行った。
そして、また私と１６歳くらいの女の子が一緒になった。
しばらくの沈黙の後、彼女が沈黙を破った。
「……私のこと覚えてないんだよね？」
彼女がそう聞くので私は控えめに小さく頷いた。すると次の瞬間彼女は精一杯の笑顔で私の前に手を差し出した。
「初めまして♪アナタの心友の美王だよッ！これから、またよろしくね！」
私はその元気のよさにビックリした。そして、美王さんの手を握る。手についた点滴の針が邪魔だ。
だけど美王さんは気にしない様子で握った手を激しく上下に振っていた。
「よ、よろしくお願いしますね」
私がそういうと美王さんは、アハハと笑い、
「よそよそしいのなしだよー！瑠菜と私は心友！」
病室に響き渡るくらいの声で言う。
「は、はいぃッ！」
「『はい』じゃなくて『うん』でいいって～」
そういってまた笑い出す。面白い人だ…。
私は記憶を失う前に美王さんという面白い人と一緒にいたのか、さぞ楽しかったんだろうな。
「でも、瑠菜事件当時の記憶ない？」
美王さんに唐突に聞かれた。
私は事故にあって記憶をなくしてしまったのか…。
「いえ、知りませんが。」
「はい、敬語なし！」
美王さんのダメだしがあった…――――――――――――――――。
「知らない、教えて！」
言った後頬がカッと熱くなるのが分かった。
でもそれを聞くと美王さんは笑って、うんうんと頷いていた。

「……瑠菜のことをせかしたの、私が。そしたら、信号を気にしていなかった瑠菜が車にはねられて…。」
途中から美王さんの表情が曇り、最後の方へなると声のボリュームが落ちて聞き取るのが大変だった。
…もしかすると、美王さんは自分のせいで私が事故にあったんじゃないかと思っているのでは…。
顔を伏せている美王さんの腕を私は力を入れないように気をつけながら手に取る。
その行動に顔を上げて目を丸くする美王さん。
私は美王さんの腕をつかんだまま、もう片方の手で美王さんの手の平をくすぐってやった。
すると彼女はものすごい笑い声を上げて笑い出した。
うん！これが彼女らしい、って思う。
そんな真っ最中に、さっきの女の人とその連れの男の人と私より1，2歳小さいであろう女の子が来た。
男の人はすぐに私に駆け寄り、
「瑠菜！」
と叫ぶ。
美王さんは、その勢いに気負いして後ろへ下がる。
さっき来たメンバーが私の寝ているベッドを取り囲んだ。
いろいろと質問されたが全く分からなかった。
曖昧な笑みを見せて、軽く流すことが多かった――――――――――――。

◇

私はやがて事故で負ったといわれている怪我も完治した。
学校へ行けると診断されて退院もしたのだが、学校へ行く勇気はな

く、ずっと自分の家だといわれる所の自分の部屋だと指摘されたところで

一日中過ごしていた。

学校は行かなくてはいけないことも分かっていた。

でも、行動に出ることが不可能だった。

美王さん以外知らぬ場所へのこのこ行くほど私はバカじゃない。

退院してから2ヶ月が過ぎた。

私は、母親だという人から買い物を頼まれた。

お金をもらって、頼まれたものを買いに家を出た。久しぶりに外を歩く。

地図をもらったため、その地図を見ながら歩く。

時々すれ違う学校帰りの子が

「瑠菜ちゃん！」

と声をかけてくれているのだが、全く分からない。私は、ただ笑って手を振っていた。

ちょうど横断歩道に差し掛かったときだ。

向こうで知らぬ女の人が手を振っていた。

私にではない。多分、隣にいる高校生くらいの男の人に。

「早くしてよー！！！！！！」

向こうにいる女の人が叫んだ。

――――――――――――！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！

思い出した……。
私が体験した事故のことも……美王とのことも……すべて――――――――――――。

ピー

そういえばこの横断歩道は音声機能つき横断歩道だった。
懐かしいな……――――――――――――――――――――。
気が付くと信号は赤になっていた。

買い物を速球で済ませて、私は家路を猛スピードで――――――――――――――――――――でもちゃんと周りを気にして走る。
家に帰ると、買い物袋を玄関に放り投げる。
母は
「どうしたのよ～？」
と聞いてきたから私は満面の笑みで答える。
「思い出したよッ！ぜーんぶ思い出したよッ♪」
私がそういうと母は呆然としてその場に立ちすくんでいた。
私はそんな母の前で手を動かす。反応なし！
「じゃ、こんな果報を美王に伝えてくるんで～♪」
そういって私は家を出た。
チャリを使って美王の所へと向かう。

美王の家へ向かう。

チャイムを押すと、すぐに美王は出てきた。
「な、どうした？」
そういう美王に笑う。
「あはッ。思い出したぜ、相棒～♪」
そういうと美王はイキナリ涙を流した。ちょっと、ドキマギしちゃう。
「ちょ、嬉しいよ……。瑠菜、マジ？冗談だったらぶっ殺すよ～？」
「美王さん、キミ笑顔で『ぶっ殺す』はないでしょっ」
私たちはそれで笑う。
「あはは、マジだよ～。」
「美王にぶっ殺すは似合わないし～」
「似合うよ～。超絶的にフィットしてるやん！」
そういってまた笑う。

この笑い声がこれからも聞けますように。

懊悩焦慮編（前書き）

懊悩焦慮編

「ね、色鬼やろうっ！」
いきなり学級委員長が言い出した。
今の季節は、４月――――――――――――――――…。私はまだ中２。
名前は、七瀬亜依香。
クラス替えがあって、結構メンバーが変わったためまだ
クラスになじめていない。
だからだろうか。学級委員長は提案した。
先生もＬＨＲを使ってなら――――――――――――――――といっている
し、別に断る理由もない。
ちょっと子供っぽいかな、と思うくらいだ。でも、みんな……みん
ながやるのなら。

「鬼は～？」
ＬＨＲの時間。学級委員長が叫ぶ。先生とじゃんけんするという形
になった。負けた人が無論鬼だ。
私は一回戦勝利したため鬼という面倒な立場から回避する事が出来
た。
負けたのは、川岸菜里さん。
ちょっと不機嫌そうに頬を膨らませている。川岸さんとは今回初め
て同じクラスになったためまだ話した事はない。
でも、近くにいた女の子達が慰めている。

ピー

先生のホイッスルの音で始まりの合図がなる。
迷ったように腕を組んで不意に言葉を発す、川岸さん。
「青――――――――――――ッ！」
青という言葉を聞いて私はすぐに走る。
そうだ。
今日のハンカチは青色だったような気がする。
私はハンカチをつかむ。みんなを見ると、自分の髪ゴムを触っていたりしていた。
先生の姿を気になって探したが見当たらなかった。
教員室へ帰ったのかもしれない。
「……ん～っと、赤！！！！」
あ、赤！？
私はみんなが集まっているところへ走る。
そこで見たものは――――――――――――……。
ささくれを無理矢理むいて自分の血を触っている……中田さんだった。
みんながそれを注目してみている。
私はハッと気づき、川岸さんを見る。
彼女は、放心状態にしているのか虚ろだ。
私はどうやって、『赤』を手に入れようか考えていた。
私が川岸さんの方を見ていてみんなも気づいた。赤を探さなければ――――――――――――――――と。
赤……赤……。
考えると、中田さんの血が伝い落ちる姿が頭に浮かぶ。
ダメッって思うけど、ビジョンは続く――――――――――――――――――――。
私が頭の中の映像で苦しんでいたとき急に川岸さんの口が開いた。

「――――――――――――……で、赤は？」

小さく動くその口が怖い。
頭の中に浮かぶのは、『血』の赤。私は背筋がゾクッとする。
いったい、彼女は何を考えているのだろうか………。
「だ・か・ら、赤は？」
催促するように、川岸さんは言う。
すると、その言葉に怒った男子が一人言う。
「……ったく、そんな催促するんだったら捕まえろよ！」
そういって川岸さんの場所へ行く。
川岸さんは動く気配がない。
男子は川岸さんの前に立った。
そして、手を突き出した。自分から、鬼になろうとしているようだ。
「……ほら、捕まえてみろよ。」
そういったときに、彼女の手が動いた。
男子の腕をつかんで、もう片方の手でかきはじめたのだ。しかも、力を入れて。
「やめろ！」
男子は思いっきり対抗するが川岸さんはその手をやめない。

数分後、男子の腕は掻き毟られていた。血が手を伝っている。
ポタリ……と、血が地面に伝い落ちてゆく。にじむその血が怖い。
川岸さんの爪の中には、血が溜まっていた。
私はその姿に釘付けだった――――――――……。

「――――――――ね、七瀬さん？他のみんなはどうしたのかなぁ～？」

その声が響いた。
……え？他のみんな？みんなは近くにいるじゃない…。
そういって私は近くを見渡した。

――――――――――――……あれ？

みんながいない。
何でだろう。私と、川岸さんと男の子だけだった。
「……あ～ら。いなくなっちゃった……か。」
「か、帰ったんじゃないかなぁ～」
私は少しずつ後ろへ引き下がる。この人に何をされるか分からない。
「……へぇ。」
「逃げろッ！！！！！！！！！！！！」
いきなり、大きな声を上げる男子。
あ――――――――――――思い出した。
この人、遠藤君だ。始業式にヤクザに絡まれてた私を助けてくれたんだ。恩人を忘れるなんてバカだなぁ。
……とか思い出に浸ってたりしたらすぐに殺られるよね。
私は遠藤君の言葉どおり後ろに木が茂っているところから汚れる事覚悟で抜ける。
そこを出ると、目の前に昇降口が見える。私はとにかく、走る。
後ろから気配はない。
ちょっと木陰に隠れて休む。
息が荒い。何でだだろう。遠藤君を見捨ててきたことも罪悪感が強い。
「……あ～ら。お休み中？」

――――――――――――――――……！！！！！！！！！？

いきなり前に来る川岸さんに私はビクりとする。腰を抜かしていて立てない。

「に、逃げてないんだよ、あ、赤色探してたんだよ！」

私はとっさに『赤』といってしまった事を後悔する。

「そ～だよね～。逃げれるわけ、ないもんね。」

「そうそう～。探してたの…探して」

そこまで言ったところで腕をつかまれた。

あの時みた、掻き毟られる姿が鮮やかに浮かぶ。

イヤだ、イヤだ……。のろわれた運命なのかな、川岸さん。

なるべくしてなった運命なんだね。

「……イヤ、離して。」

私は小さな声でつぶやく。その声を聞かなかったのか腕に力をギュゥと入れる川岸さん。

「私、あなたとはお友達になれると思ったんだけどね～。」

そういってもっと力を入れる川岸さん。

涙が伝い落ちる。

「私もそう思った！！！！でも、こんなのいやだ！委員長が色鬼主催した理由忘れたの？早く離して！」

私は有りっ丈の力を振り絞ってその言葉を言う。

狂った彼女を少しでも揺らげられたら……というただその一身だけで――――――――――――。

「こんな綺麗な血管初めてみた……。」

彼女が私の手を見る。

「……ねぇ、知ってるんでしょ？な・な・ふ・し・ぎ」

そういって私の手を離す。私はずっと手を離そうと前に力を入れていたため、体制を崩し転ぶ。

コンクリートのため、膝から血が流れないか心配だった。
「七不思議？」
「鬼遊び、しちゃいけないんだよ。幽霊がとりつくから。」
え？
「待って！川岸さんは川岸さんでしょ？」
「……あなたは選ばれた人。鬼と互角に戦えることのできる人。」
私たちがにらみ合ってると、遠藤君が来た。
「逃げろっつってんだろ！！！！！！！！！」
遠藤君は、余計ぼろぼろになった姿で。
「ヤダヤダヤダ！！！！！！！！私は戦うよ！あなたのため――――――――――――クラスみんなのために！」
「逃げろ！！！！！！！！！」
「いやだ！」
私はそういって遠藤君から目をそらす。そして、目の前にいる構えた鬼を見つめた。
頬まで裂けたその口はニヤリと笑っていた。
「やれる気？」
「今になって逃げるなんてバカのやることね。」
そういって近くにあった石を数個手に取る。一つの石を右手に握る。
「へぇ…。殺るき満々か」
「あはははははは。そうでしょ？はは…ははは…。」
私は気が狂ったように笑った。

そして、相手が近くにあった小枝を拾おうとした隙に私は小石を投げた。

私は的確に鬼の目を射止めた。
血か涙か分からない混合物が流れる。眼球に当たったからグチャリとつぶれた目。
私は余りのグロさに背を向ける。

背を向けたのが終わりだった。

グサリ

後ろに激痛が走った。

「七瀬ッ――――――――――――――――!!!!!!!!!!」

遠藤君の声が激しく私の中で響く。

痛さをこらえて私は目を開けた。

「…ゴメン……‥…い…うこと…。」

言う事聞けなくて――――――――――――――――といいたかったが目を開けてることがつらかった。

「……どうしたんだよー!!!!!!!!!」

「……ゴメンね。」

退治できなくてごめんね、ゴメンね、ゴメンね――――――――――――――――……。

遠のく意識の中私はずっと謝っていた。

血塗られたような赤い夕日が地平線に沈んでいった。

懊悩焦慮編（後書き）

ちょっと、話の内容分かりませんね。
ごめんなさい…。

佞悪醜穢編

「助けて！！！！！！！！」
泣き叫ぶ葉月。
私は、そんな物体関係なかった。私は、私自身が助かればいいんだ。
誰も、必要じゃない……。
「葉月だって、私を見捨てたくに……。命乞い？」

ココは教室。
いつもなら今は数学を受けているところ。
でも実際は違う。生きている人は、この学校中で探したら葉月と夏樹しかいない。
そう――――――――――――――――。
夏樹がいきなり1時間前から暴れだしたのだ。
葉月と夏樹は、親友である。なのになぜ、葉月を襲っているのか…。
理由は、ない――――――――――――――――……。

窓の外から叫ぶ警察の声。
「田中夏樹に申す！！！！！！！！人質を解放せよ――――――――――――――！！！！！条件は何だ！！！！！！！！」
…うるさいなぁ。
私は威嚇しようと、手に持っていた短刀で外と通じる窓を切り裂く。
地上にガラスが舞う。下にいた警察と保護されてしまった先輩や後輩が頭を伏せる。
「バカだね……。」
私は葉月くらいにしか聞こえぬ声でつぶやいた。
「私を殺したら、下にいるみんなは助けてくれるの？」

葉月が叫ぶ。
「……別に私は殺しがしたくて殺してるわけじゃないよ～？」
前までは、私が笑うと葉月も一緒に笑ってくれた。
なのに、私が今笑っても逆に葉月は恐れをなす顔となって私を軽蔑する目を向ける。
何その目…。

「返して！！楽しかったあの日々を返してよ！！！！！私の……私の楽しかったあの日々を返してよ！！！！！」
そういって、葉月はまた私を軽蔑する。
私はその目が嫌いだ。
本当に、邪険に扱われている感じで。
そんな、目、なくなっちゃえばいいのに――――――――――――――――。
「ダメ、ダメ、やめて！！！！！！！！」
同じクラスの田島さんの首が近くにある。
ちょうど頭が真っ二つに割れたその頭。普通は私もグロすぐて見れないかもしれない。
でも、今は普通だ。
むしろ、私の中に流れている血が踊りだす。
「ねぇ、葉月は自分が死ぬのと死体が余計姿を乱すのどっちがいいかしら？」
私は優しく微笑む。
「どっちもイヤ！！！！！！！！！悪魔！！早く……早く夏樹の体を返して！！！！！！！」
葉月は私を強く睨みつける。
「死体を傷つける方がいいよね～。ね～？だって、まだ死んでない人はゆっくり殺さなきゃ……ね」
私が微笑むと葉月はビクッとする。
田島の目を近くに転がっていたシャーペンでさす。

グチャ

と言う音が教室に響く。
「アハハハハハハハハハハハハハハ」
葉月が軽蔑した目で私を見る。
「何？その目……。」
そんな目しないでよ、親友じゃん。
「やめて！！！！！！！！！私たちが何したの？」
教室の一角で座り込んでるただの物体がうぜぇんだよ。
シャーペンを握ったまま、私は葉月のところへと行く。
「……殺されたいの？その目、やめてよ。」
私がシャーペンをしまい、ポケットから代わりに短刀を取り出す。
「やめて！！！！」
叫ぶ葉月の声が私の気持ちをそそるんだって。
私は殺さぬように、葉月の腕を割く。
「いやぁぁぁぁ――――――――――！！！！！！！！！！！」

ザクッ

という効果音がぴったりだ。
「やめて！！！！！！痛いよう…痛いよう」
葉月が叫ぶ。
私はその声をゆったりとした気分で聞く。
「アハハハハハハ」
「……やめて！！！！！この悪魔めっ！」
「悪魔…その言葉やめてくれない？」
私が睨む。
葉月を睨んだの初めてかな……。私を怒らせると―――――――――
―――…どうなるか分かるよね？

「仕方ないから後1回言ったら殺すよ」
私がそういうと葉月はギュッと下唇を噛む。
「そうね。それが利口ね。」
私はニコリと笑った。
そして、窓へと向かう。さっき切り裂いたため、窓がオープンになっている。
窓から下を除くと警察がすぐに気づいた。
「……滝川葉月を解放せよ！」
「…条件…はね、そこに保護している人ぜーんいんを私のところへ連れてくること…。」
私がそういうと、警察は
「…その条件は飲み込めない！！！！素直に言う事を聞け！」
…へぇ。
ガラス雨くらいじゃダメか…。
私は教室にあったはさみを集めて、窓から落とす。
銀色の刃物が空を舞う。
なんて鮮やかな景色なんだろう。
下の奴らは慌てて――――――――――――…。
「アハハハハハハハハハハ」
私は高らかに笑う。
その様子を口をふさいでいた葉月が声を発する。
「……やめて、悪魔！！！！！！！！！夏樹を帰せ！！！！！！！！！！！！私の親友返せ！！！！！！！！！！！！」
「……てよ。」
「はぁ？」
「だから、悪魔って言うのやめろっつってんだよ！」
私が感情に任せて言うとビクッと葉月がする。
「……はぁ。葉月は私の親友だと思ったのにね。」
そういって私は短刀で彼女を切り裂いた。
胴体――――――――――――首――――――――――――手足……。

全てをばらばらにする。

「お掃除完了☆」

私は彼女の部品を全て抱え込む。
そして、窓から投げ捨てた。

空を見上げると、血塗られた夕焼けが広がっていた――――――――――。

佞悪醜穢編（後書き）

ホラーなのか何なのか…。
微妙な終わり方ですね。。。

孤落不羈編（前書き）

第二弾☆
学アリＦＦです

孤落不羈編

Pがアリス学園に出没しなくなってから約2週間が過ぎようとしていた。
殺された、教師や生徒たちのことを覚えている生徒たちはもう学園には存在していなかった。檸檬を例外とすればの話だが。
Pのことを知っていた教師や一部の生徒もすべてPの催眠術でその記憶は飛んでいった。もうもどることのない記憶だ。
しかし、怪盗Pのことを覚えてる人が学園にはまだ3人いたのだ――――――――――。

◇

「岬センセッ」
檸檬が背後から岬に声をかける。思わず彼は持っていたプリントを落とす。
それを拾う檸檬は楽しそうだ。
「何だよ……。」
「ん？いたから呼んだだけ～」
そういってくすくす笑う檸檬。プリントを岬に渡す。
「そういえばさ……。教員がPのことを覚えていないんだが…。」
「あぁ。Pの催眠術ですよ。」
そういってさっきとは違った笑い方をする檸檬。
いつものあの優しい笑顔はどこかへ消えていた。その笑顔を見た岬はビクりとする。

「先生が気にすることはないですよ！それに覚えてるのは、私たちを含めて3人だけですから。」
そういってまた優しい笑顔に戻る檸檬にほっとする岬。
「え？2人じゃないのか？」
岬が疑問に思って聞く。
「はい！私も詳しくは教えられてないんですけど、多分……。」
この言葉の後に岬が少し考えてポンと手を打って言う。
「安藤か！」
「多分、そう思いますよっ。」
檸檬がくすくす笑う。
「でも最近来ないよな、アリス学園に。」
「え？毎晩私の部屋に侵入してますけど。で、愚痴ってますよ。」
それを聞いた岬の目が丸くなる。
あの防犯システムを毎晩突破するほど、気力が残ってるとは思えない…。
「そうなのか…。タフなんだな。」
「先生は今防犯システム突破することが……タフだって思ったでしょ？Pに言わせれば、防犯システムを13万回越すのと部活1回がキツいらしいですから。」
それを聞いてまた目を丸くした。
どれだけキツい部活なのか――――――――――…。
それを聴こうとした瞬間予鈴がなる。
「じゃ、先生またッ。」
「あ、あぁ！」
そういって二人は分かれた。

◇

「南ちゃん……真由ちゃん……。」

ただいまP、部活の休憩中。
部活友達の南と真由菜を呼んで同学年の部活メンバーの悪口を言うのが日課。
邪心があると、うまく踊れない！それだけに集中しろ！
先輩の言葉が頭痛の原因だ。だから、最近体がなまってるんだよ！
Pは心の中で叫ぶ。
「ほら早く鏡の前で練習練習！」
杉村先輩――――――――――Pが今現在最も嫌う先輩。Pと同様に南や真由菜も嫌う。次の公演の指導者。
本当に厳しい先輩。

この先輩の指導を受けてるときに、毎回思うこと――――――――先パイに会いに行こうかなぁ…。
ただそれだけで今までの指導を乗り切ってきた。

「ほら、ぼーっとしない！」
杉村先輩の冷たい声と目線がグサリとPに刺さる。
「すみませんでした」
これがもう部活があるときの名物といってもいいくらい……。

◇

「あ、来た」
檸檬がそっと呟く。
そして、窓へ近づいて窓を開けた。
とたんに入ってくるP。
「ありがとう…。毎晩毎晩悪いね～」

窓開ける手間が省けて嬉しがるＰ。その様子をくすくす見ている檸檬。
「あのさ、結局原田さんとかどうなったの？」
「ん～。うちんちの目の前の森の中にある牢屋に入れといたぁ。そろそろ死んでるんじゃないかな？」
そういった後に高らかな声を上げるＰ。
「ちょっと～仮にも夜なんだよ？」
「あはは。ゴメンゴメン。」
「それにしても、殺し方が無残だよね～。確かに翼先輩から記憶はなくなったけどさ。」
そういって檸檬がクスリと笑う。
「そりゃ、Ａが教えてくれた催眠術は世界一だからね」
「へ～。まだＡｐｐｌｅさん生きてたんだね」
「生きてるよ！ボスを悪く言うなぁ」
そういって頬を膨らませているＰ。一度機嫌を損ねると厄介なので究極の一言。
「部活があったってことは、翼先輩に会いに着たんでしょ？」
檸檬を横目でちらりと見た後にＰがそっと言う。
「……そうかもね。」
「じゃ、案内するよ。」
「あ～。でも私のこと覚えてないよ。」
そういってしょんぼりするＰ。
「大丈夫だよ。だってあの青い羽根もってるよ、翼先輩。」
なぜ、中３の檸檬が中２の翼先輩を『先輩』をつけて呼ぶのか――――――――。理由はただひとつ。
本当は中１だから。頭がよすぎて飛び級をしたのだ。
「青い羽根…ねぇ」
不満げなＰ。
「だったら、そんなタキシードとか着ないできなよ。」
「えー。イヤだぁ！これはＣのお気に入りなんだよ！」

「はいはい」
あきれたように先を歩く檸檬。
その後ろをスキップしながらついてゆくP。
歩いている途中でPはあることに気が付いて立ち止まる。それに気づいて檸檬も止まる。
「どうしたの？」
「窓以外にどうやって侵入するの？」
そう。普段翼先輩の部屋に侵入するとき、Pは窓の鍵をあけて入るのだ。それで、青い羽根を意味なく残して帰ってくるのだ。
「え？普通にドアから」
「そんな方法面倒だからやりたくないよ～」
「ノックして普通の人間らしく入るの！」
「怪盗だってことがバレる！」
「平気だよ！」
そういって行きたがらないPのマントを引きずりながら翼先輩のいる部屋へ向かう。

「ほら、ノックしなよ！」
「ヤダ」
目の前に広がるドアの前で小声の言い合いが始まっていた。
背を向けて一人でマジックを楽しむP。それをあきれた様子で見ている檸檬。
「私ひとりで行くよ？」
「いってらっしゃい！私、自練しろって先輩に言われたから…。」
そういって全力疾走するP。それを捕まえようと追おうとしようとしたが体力の無駄だからやめた檸檬。これからどうしようかドアの前で考える。

檸檬が部屋の前で考えていた１０分後。
ドアが開いた。
思わず目の前で考えていた檸檬は数メートル先に投げられる。
「ふぎゃぁ…。」
「大丈夫？」
檸檬は差し出された手を軽く流して立ち上がる。
「どうしたんですか？」
「下で高校生の男の人がマジックやってるから騒ぎになってるんだ、知らないのか？」
……マジック？
そういえば、さっきPを逃がしたままだったっけ…。檸檬は一緒に下まで連れて行ってもらうことにした。

「これ見たら一目瞭然だろ？次は鎌だすぞ！」
「お兄ちゃんなんで凶器しかださないのぉ？」
そこには取り囲まれて何かを凶器を出しまくっている高校生の位の男の人がいた。
「これじゃー見えねぇじゃん」
「あ…はは。そうですね。アナタの姿が見れればあの高校生の人いなくなりますね。」
「どういうことだよ」
檸檬たちは少しはなれたところで見物していた。無論見れるはずがない。教師たちも大勢いた。
身長的に見えるはずがない。
「…じゃあ、次は何だしてほしいんだ？」
マジシャンが言う。
「お花！」
その言葉を聞いて哀しそうに微笑むマジシャン。

「俺は、殺人マジックが得意なんだよ――――――――――」
その言葉を聞いた檸檬が行動に出る。
「Ｐ――――――――――！！！！！！！！！」
檸檬の声を聞いてドキリとするＰ。
みんなその大きな声のほうを向く。
その瞬間
「Ａｄｉｏｓ！」
檸檬はその消える方向をちゃんと記憶していた。
「行くよッ。」
「え？俺も？」
中学棟屋上――――――――……。
二人は中学棟屋上へ向かった。

「あ～。疲れたぁ」
Ｐは檸檬の言った通り中学棟屋上で休んでいた。
まだ、ちゃんと変装はといていない。
ば真っ逆さまだ。
――――――――――檸檬先輩は必ず来る…。
そう思いＰは今落ちるギリギリの場所に立っている。一歩間違えれば真っ逆さまだ。
Ｐは落ちる準備をしているように、落ちないように設置されている柵の向こう側にいるし、落ちる準備をしているかのように、柵に背を向けている。
数分後に二人は到着した。
「ちょっと、Ｐ！」
足音が二人分…。あと一人は、岬先生か――――――――――Ｐは勝手に解釈している。
「早く変装と着なさいよ！」
「イヤだ。」
声も男子校生の声だ。

「もー！女の子でしょ！」
その声に翼が
「え？」
その声を聞いてビックリするP。
ビックリした拍子で足を踏み外してしまった――――――――――。
「いやぁぁぁ――――――――――――！！！！！！！！！！！！！！！！」
Pの叫び声が響いた。もう、Pの声だった。
「まさか…Pが落ちるなんて……。」
呆然とする檸檬。それに変装も解いていない。うまく空中を飛べるとも思えない。
「とにかく下行くぞ！」
依然として呆然としている檸檬を無理やり下へ連れて行く。

下に行ったが、そこには何もなかった。
「よかった…。死んでない。」
「もし着地が成功したとしても傷だらけ。早く探せ！」
「はいっ！」

「痛っ……。」
足や手にはひどい打撲痕が残っている。
顔のところどころからは血が。
幸い途中でネタに使っていた大鎌で勢いを下げていたためそのまま落ちるよりはダメージが少ない。
――――――――――――どうしよう…。こんな状態じゃ学園突破でき

ないよ
酷く傷ついたから、突破できる可能性は少ない。
それに今は時間も時間。Aたちに電話するのも気が引けるし、怪盗の名を汚したくない。
杖にしている大鎌の柄に顔からたれる血がにじんでゆく。
「これお気に入りなのになぁ」
白いタキシードがもう土や血でところどころ染みができている。

「Pッ――――――――――――――――！！！！！！！！」
背後で人の声がした。
思わず、構えの姿勢をとる。
「――――――――――――誰だよ」
中1の女の子が構えるのと、高校生の男が構えるのじゃ迫力が違う。
だから、まだPは変装を解いていない。声も一応男だ。
「弱りきってんじゃん！」
後ろで檸檬の声がした。檸檬か…。でも檸檬っぽい敵かもしれない。
「俺だよ、安藤翼！」
その声を瞬間、Pは気を失った。

磊落不羈編（後書き）

これは次編に続きます！

生殺与奪編

目を開けるとそこには知らない部屋が広がっていた。
そっと解かれぬままになっていた変装を解く。
――――――――――――これで幾分楽だ……。
なぜだか知らぬが、心地いいベッドにもう一度目を閉じた。

朝が来た。
檸檬が椅子をつなげて寝ていたが、太陽が昇ってきたので起きる。
そして、相変わらず起きぬPを心配げな目で見る。
Pの治癒力なら、一日で治ってもおかしくないはず……――――――――――――。
そして、変装の解かれたことに気づきビックリした。
変装を解く、ということはわずかでも起きていた、ということだ。
「ったく。早く治りなさいよ…。」
そういっていまだ起きる気配もないPに向かって呟いた。

２時間後瑠璃が朝食に誘うため部屋へ来た。
檸檬は、極力部屋の中を見せぬように努力した。
モノクルをかけて体中に打撲痕まみれでついでに血がたくさん付いているＰを見せたらどんな騒動になるか…。
檸檬はいったん部屋を離れた。
きちんと鍵をかけて。

◇

学校が終わり部屋へ戻る檸檬。瑠璃は途中で別れ、そして途中合流した翼も一緒にいる。
部屋へ入ると相変わらずキツい血のにおいが鼻を刺激する。
そして、朝と変わらぬようにしているＰ。
朝と変わらない。何もかも変わらなかった。

紅茶を持って、あげる檸檬。
「ありがと」
「ううん。ねぇ、Ｐ起きると思う？」
檸檬が疑問が起きる。
「起きなかったら、俺のせいだ…よな？」
そういって顔を青くする翼。
それをくすくす笑う檸檬。
「安心して。どんなことがあっても、先輩に悲しませてはあいつ死なないから。それにアリスとか使って生き返るでしょ」
そういって笑う檸檬。
「あいつアリス持ってるの？」
「うん。しかも超絶的に強いアリスだよ？知らないんだぁ…。」
そういって紅茶を飲む檸檬。

二人の間だけハーブティーのにおいで囲まれる。
「あのね～、Pはバカなんだよ。だって、翼先輩がアリス学園にいるんだから入学すればいいじゃん？なのに、家に来た先生殺すんだよ！残酷
だよねー！まぁ、私も最初は殺してたけどね」
「俺がいたらなんか得があるの？」
「ん～。乙女の事情？」
そういって笑い出す檸檬。
「ま、そのうちPから伝えられるよ。私も多分ここにいなかったなぁ…」
檸檬がアリス学園に入学した理由は、勧誘に来た岬先生に一目惚れ。
だから、入学したのだ。
恋する乙女っていうのは大変だ――――――――――――――――。
「そういや、檸檬がアリス使ってるのみたことないけど……？」
「ん～。基本私アリス使いたくないし～。」
「命が縮むから…？」
「あー。必要性がないから…だよッ♪Pじゃな……」
――――――――――――――――――Pじゃないんだから。
そう言おうとして檸檬は自分の口を塞ぐ。
P自身、あまり言わないでほしいといっていたことをこんなあっさり言うなんて…。
「P――――――――――――――――――はアリスを使うと命が縮むのか？」
やっぱり、あそこまで言って気づかない人もいないけど、気づかれたことにショックを受ける檸檬。
紅茶を飲み干すと、こくんと頷いた。
「――――――――――――――――そうだよ。縮むよ、Pは。だから殺人マジックとか幻術とか催眠術に力を入れてるんじゃん…。」
そういってため息をつく。
翼はそれを聞いた後ベッドで寝ているPを見る。
そんな風に見えなくもない――――――――――――――――――――――――――――――――。

「でもすごいよね～。アリス２つも持ってるんだよ？風使いだし、時使いだし……。」
そういってまた檸檬はため息を付いた。
「もしココに入ったとしたら、『特力』だな…。」
その言葉に即座に否定をする檸檬。
「それがね～、力が強すぎるから『危険能力系』なんだよ。かわいそうだよね～」
そういってポットから紅茶を注ぐ檸檬。
「俺にももう一杯ちょうだい」
そのままポットの向きを変える。
注ぎ終わった檸檬はそっとＰの方へ目を向けた。
相変わらずの体制で深い眠りにいるＰ。
――――――――――――――……早く、元気になぁれ

「……先輩のバカ！！！！！！！！！」
日もだいぶ暮れて、二人が夕食を終えて檸檬の部屋にいたときに不意にＰが叫んだ。
それに、思わず二人ともＰの方へ視線を向けた。
一瞬の出来事で、檸檬が頬を抓ったりしても全く反応がない。
「……翼先輩、何かしました？」
冷ややかな目線で見る。
「べ、別に俺は何もしてな…」
「してますよね？」
そのあまりの迫力に冷や汗が流れる。
「もうすぐ起きるね～。眠りが浅くなってきた。寝言いえるくらいだもん」
そういってニコリと笑う檸檬。

「先輩、起きたら聞かなきゃいけませんね。俺のドコがいけないんだ～って」
そういって噴出す檸檬。
その高らかな笑いが部屋に響く。
その後に、檸檬がポンと手を打つ。
「ねぇ、起こしたい？」
「まぁな…」
「じゃ、Pは今から眠り姫です。だから、王子様を連れてこなきゃいけません。はい、つれてくる！」
「え？誰を？」
そういわれた後で腕を組んで考える檸檬。
パープル？それとも山下先輩？それとも入江先生？
候補者が多すぎて頭が混乱してきた。
「じゃ、先輩すれば？確実に起きるよ。」
「え、俺？」
顔を真っ赤にする翼にくすくす笑う檸檬。
「あはは。先輩がしても意味ないよ。一瞬起きるけど、その後また失神しちゃうから」
それだけ言ってまた笑い出す檸檬。

Pが檸檬の病室で看病されてから一週間が過ぎたある日。
目を開けて真っ先に見えたのは、翼先輩の姿。
「……安藤先輩…。」
いすにもたれて寝ている翼先輩を起こそうか迷った挙句、寝顔が可愛いからやめた。
机の上においてあったシルクハットをかぶる。

シルクハットは、ちょうど頭が当たるところに真っ赤なしみができていた。
クリーニングに出さなきゃな――――――――――――――…。
Pはそっと窓から飛び立った。
翼先輩の横に、青い羽根を置いて――――――――――――――――……。

「ちょっと、バカ――――――――――――――――

俺は授業を早めに切り上げて北の森へ向かった。
大きな木が一本あった。
その木を見ると誰もいない。
まっすぐ俺はその木へ向かって歩いていた途中――――――――――――――――――――。
「岬先生っ！」
後ろから無邪気なあの愛しい声が聞こえる。
「何だよ…檸檬やっと来たか！」
俺はそういって檸檬と向き合う。
檸檬は手を後ろで組んでいた。
「で、用事って？」
「これ……すごい恥ずかしいけど渡したくて」
檸檬から手渡されたのは、青い羽だった。
前にPと会った頃においていったのと同じ羽……――――――――――――――――――――。
「い、意味なんて分からなくていいの…！受け取ってくれます？」
顔を伏せているその愛しい様子を俺は見る。
「いただくよ」
俺は歩きながらちょうど檸檬とすれ違うところで囁いた。
その羽は、透き通るような青をしていてとても綺麗だった。檸檬のあの様子が可愛く仕方ない。
俺はその羽を上着のうちポケットに入れた。

◇

「せんぱ～い！！！！！！！」
私はドアをたたく。先輩の反応はないらしい。じゃ、お出かけ中か

な？
諦めたくないから私はとにかくドアに向かって、先輩、と叫ぶ。
そのとき後ろから目を手で覆われる。
「ふぎゃ！」
「さぁ、誰でしょう？」
この手…。
「安藤先輩だぁ」
私が答えるとそこには、そこには笑っている先輩がいた。
「でも檸檬が俺の部屋訪ねるなんて…」
「たまにはいいじゃんっ。一人は……さびしいよ。あれ以来Ｐこないしさ…？」
「まあとにかく中入れよ」
中は豪華ですごく感動をした。
「Ｐこないのか？」
「――――――――――――落っことしたの私だからかな…。来てくれないんだ。先輩のところは来た？」
私がそういうと先輩は小さく首を横に振った。
「そっかぁ…。どうしたんだろう？先輩も心配？」
「…まぁ……少しは。俺の責任だし」
「ううん！私が悪いんだよ！先輩は悪くないっ！」
私がそういうと先輩はまた笑ってくれた。
「まぁ、Ｐも忙しいんだよ。特に部活とか。よく私に愚痴、言ってくるもん」
「部活かー…。俺が代わりになってもいいけど」
「うわー！Ｐの部活『ダンス部』だよ！興味あるんだ～」
私がそうからかうと先輩は慌てたらしい。
その様子に私は思わずくすくす笑った。
そして、そっと壁にかかっている時計を見る。
もう１０時――――――――――――…。
「あ、すみません！ちょっと時間が…。安藤先輩、また明日…来て

もいいですか？」
「来いよ、歓迎するよ」
「じゃ、また明日ー！」
私は部屋から出ると自分の家へ足を進めた。

◇

あれから毎晩翼の部屋に檸檬がきた。いろいろな話で盛り上がってた。

たまたま移動教室のときに、檸檬を発見した翼は声をかけた。
「おーい！檸檬」
すると檸檬はビックリしてその声の方向へと返した。
「翼先輩どうしたんですか～？」
「いや、今晩も来るのか？」
「はい？」
どうも話がかみ合わない――――――――――――――…檸檬は疑問に思う。
「いや、いつものように今晩も…」
その言葉を途中でさえぎる檸檬。
「『いつも』って何のことですか？」

「いや、毎晩俺の部屋で…」
「私行ってませんよ？瑠璃と話してたりしてましたから」
やっぱり話がかみ合わない――――――――――――――――……。
「れーもーん！移動教室、次の時間理科！岬先生だよ！」
その声に顔が明るくなる檸檬。
「先輩、今日夜わたしの部屋で待ってます！」
それだけ言い残すと、スキップしながら瑠璃の方へ檸檬は行った。
「時間……いつだよ」
満面の笑みを浮かべている檸檬に翼の嘆きは聞こえるはずがなかった。

「――――――――――――――――ってことは、毎晩来てたのは檸檬じゃないってことか？」
「……おそらく怪盗君だと思いますよ。変装名人の」
そういって頭をかける檸檬。
自分に化けていたなんて気づきもしなかった…。
「最近Pと音信不通なんですよ。今晩も会う約束したんですか？」
「ん、ああ」
「じゃ、今晩私も行きますね。どれだけうまく化けているのか拝見に…」

◇

いつものようにPは檸檬の姿で現れた。
部屋に入ってビックリした。
中にいたのは、本当の檸檬だったから――――――――――――――――。

つかつかと歩いてきた檸檬はＰの頬を平手する。

パチーン

「これで７回目ですよ～」
なみだ目のＰが言う。
「全部Ｐが悪いんじゃない！電話にも出てくれないし！」
「え～。バレるのが怖かったんだもん…。」
そういっていきなり変装を解くＰ。
いつもの、シルクハットにモノクルの姿だ。
「あんたね～、まともな服きてれば翼先輩だって入れてくれたよ…。」
そういって翼を見る檸檬。
いきなり自分に視線が着たから慌てる翼。
「え～。私服とかやだ。スリルがないもん！檸檬に化けると面白かったな～」
「絶対私の口調真似できなかったでしょ？」
「できてましたよね？」
「あ……多分な。」
その答えにＰが言う。
「やっぱりね～。さっすが安藤先輩♪」
その言葉を聞いて、すかさず檸檬が突っ込む。
「今、私と違うの発見～」
その言葉にきょとんとするＰ。
「私は普通『翼先輩』って言ってるもん。あんたは『安藤先輩』でしょ？」
その大失態にＰはへなへなと床に座り込んだ。
「……そのくらいじゃ分からないって！」
そういってアハハと笑うＰ。
「怪盗Ｐｉｎｅａｐｐｌｅ一生の不覚ね！なんで名前で呼ばないの

？」
その問いに、翼も考える。
「え？だって、どう考えたってそういうのはず…」
そこまでPが言うことはできなかった。

ノックの音がしてすぐに、誰か先生の
「入るぞ、安藤」
の声。
思わずみんなが硬直した。

生殺与奪編（後書き）

次編は、Ｐの乱心から始まりますッ！
グロ要素が入ってくるので次回からは
ご用心を

盈満之咎編

檸檬が思い返す。

――――――――――――――この声……確か、

「ペルソナだ！」

その声に真っ先に反応したのは、P。

よく学園勧誘に来たときに殺せないという事で、目をつけている人物。

その人物が今ドアを隔てて目の前にいるという事実――――――――――――――。

Pはそっと時を止める。

「逃げて、先輩！」

檸檬一人が部屋の中で止まる。

「早く、窓からの方がいい！殺されたくないんだったら逃げて！」

その言葉にすぐさま行動を起こす。

「どっかに隠れてて……多分檸檬が……来る」

「お前は？」

「戦う」

その言葉も行動されながら交わす言葉だ。

Pは檸檬を人目のつかない物影に隠れさせる。

「じゃあ……また後でな」

「うん――――――――――――――――違う世界でも覚えててくださいね」

悲しそうな笑みを浮かべてPが言う。その言葉を聴きながら翼が窓から飛び降りた。

パワーの消耗がすごい。

体が上手く動かない。その中でPは檸檬に変装する。

そして、そっと時を動かす。

動かした瞬間ペルソナが入ってきた。

「――――――――――――――――お前！」
その言葉につらそうに、笑顔を見せる檸檬。
「こんばんは」
「なぜここにいる？」
その言葉に一瞬Ｐの表情になる。
「お話をしようと先輩の部屋に着たんですけど先輩途中で私置いてどっかいっちゃったんです」
「……檸檬――――――――――――――――じゃないだろ」
その言葉に表情一つ変えないＰ。
「おかしなこと、いいますね。私は私ですよ」
「怪盗――――――――――――――――Ｐ」
その言葉にフッと笑う。
「全く…。気づかれちゃったら変装ときますね」
そういってＰに戻る。
そして、優雅に一礼する。
「改めまして、貴公子さん」
お辞儀した状態から頭を上げてニコリと微笑む。
「お前には任せたい仕事がたくさんある」
「えぇ。前にもおっしゃってましたよね。でも、私はさらさらそんな気持ちありませんから」
そういってクスリと笑う。
「安藤はどこだ？」
「さぁ？さっきもおっしゃった通り見ていませんわ。私が侵入した事態でいませんでした」
その答えにそっとＰに近づき腕を無理矢理つかむペルソナ。
不意に腕をとられてビクりとするＰ。
けどそんな表情をしたのも一瞬。
「あら。怪盗の私にそんな手が通用するとでも？」
そして高らかに笑い声を上げる。
「……お前！」

「アハハハハハハ…。では、私は少しお散歩でも」
つかまれた腕を無理矢理放すP。
そしてそっとドアから出て行く。それを見た後ペルソナは各教師へ
――――――――――――――――――――連絡した。
「怪盗P逃走中」

◇
北の森の中にある一本の木の上に立つP。
風にシルクハットの合間から見える髪がなびく。
そんな状態が10分続いたときだ、先生がぞろぞろと押し寄せる。
その木の近くにフェロモン体質の先生、後ろに攻撃系の先生がつく。
依然Pは自然体。構えを見せる様子さえ見せない。
先生は皆構えの体制をとっていた。
全員が準備できたと見たPは大きな声で言う。
「かかってきなさい、野郎ども！！！！！！！！」
その声に背後の木がざわりと音を立てる。
声が始まりの合図だったのにもかかわらず先生は依然構えているまま。
早めに決着を取りたかったPは一つため息を漏らして
「先制攻撃私でいいのかしら？」
それだけ言うと、いきなりとても大きな鎌を出す。
それを片手で持つ姿に先生たちが少々驚いた。
相当な重さはある。この前檸檬たちの前で見せた鎌とは比べ物にならないくらい大きい。それに刃の部分が鋭く光っていた。
「まずは、攻撃系の人から攻撃しちゃおっかな」
アハハ、と笑った後に急に木の下に下りる。
Pが地上に着く前に炎が飛び交う。もちろんPに狙いを定めて。
「山火事、すきなの？」
それだけ言うと、目の前にいる先生から刈る。
血が服につく。

その様子に呆然とする体質系の先生方。
困った様子で服を見るP。
「この前クリーニング出したばかりなのに～」
それだけいって前へ進む。
目の前にいたのは――――――――――――――――白い鳩。
「む？何この手紙」
そういって無造作に鳩が持っていた手紙を奪い取る。
手紙を持っていたため両足がふさがっていた鳩は自由になって遠い空の向こうへ飛び立つ。
『Pへ
無理しないでよ？ちゃんと生きて帰ってきてね。今回は私もアナタも調子がいいんだから。
これ以上世界を巡っても意味ないよ！告白されるのを待つより、せっかく正体バレたんだから
自ら告白するんだよ！
檸檬』
その手紙にニコリと笑うP。
それが隙だった――――――――――――――――。
背中に激しい痛みが走る。
背後をねらわらた。さっき刈ったはずの攻撃系の先生の攻撃だ。
血が、地面にポタリと落ちた。
痛みをこらえて飛び立とうとした。
そのとき、
「乃麻――――――――――――――――

今度こそ飛び立とうとして、羽根を出した――――――――――――――Pの背中から青い大きな羽根が出た。
「待てよ！」
月明かりで大きな影が出来ていた。
これが不覚だった――――――――――――。
影を踏まれて動きが取れない。
「何ですか？」
「P――――――――本名は？」
それを聞いて悲しそうに笑顔を向けた。
「教えてあげてもいいけど殺されちゃうもん、先輩。だから、しばらくPって呼んで？」
「乃麻（のあさ）……じゃダメなのか？」
乃麻と聞いて驚きを隠せぬP。
「え？何で知ってるの？」
「……はは。あたりか。じゃ、乃麻って呼ぶからな！」
先輩の笑顔はまぶしかった。
「親密な関係の人にしか、教えないのにね～。先輩は知っちゃったか～。それに、檸檬にしか教えてなかった私が…」
そこで言葉を切るP。
「『半獣』だってことも――――――――――――――知っちゃったんだ」
「目の前でそんなでっけー羽根だされちゃな」
「アハハハハ、じゃ次の世界でまた逢いましょうね！」
そういって無理矢理逃げ出すP。
飛び立った瞬間――――――――――――――。
思い切り足をピストルで撃たれた……。
激痛が走る。
そして、下へ叩き落される。
激しい激痛が全身に走った。
目の前には――――――――――――――。

「先輩っ！！！！！！！！！！！！！」
その声に向こうにいた翼が反応する。
それに、ピストルを撃った張本人も。
「先輩……何で、何でここにいるの？」
その赤い目から涙がこぼれる。
「助けに来た――――――――――――――――いやさらいにきた」
そういって不適に微笑む――――――――――――――――怪盗Ｃｈｅｒｒｙ。
「お前さっきチャンス狙えたらあげてただろ、羽根」
そういってその大きな羽根を指す。
苦しげな中で不適に笑うＰ。
「当たり前じゃん！あんたになんかあげるはずないよ！アハハハハ…」
そういってＰの高らかな笑いが響く。
「あげる意味、分かってんだろ」
「何言ってんの？あれでしょ――――――――――――――――…」
そこで一回言葉を切るＰ。
Ｐの数歩手前まで来た翼がその言葉の続きを聞こうとする。
「結婚の約束。アハハハハハハハハハハハハ。バカだね、先輩は」
その言葉に翼は、昔寝言でＰが言っていた『先輩の…バカ』と言う言葉を思い出す。
「だって、そんな大事な約束あんたとするはずないでしょ？バーカ」
そういって手の中から炎を出してＣに当てる。
予想外の攻撃に真っ向から食らうＣ。
Ｐと同様すぐに地面にたたきつけられた。
「……バカな。俺よりそんな奴を選ぶのか！」
Ｃが必死に叫ぶ。
その言葉に頭にきたＰは激しい痛みをこらえて倒れているＣのところへ行く。
「そんな、奴？今そういったよね、山下先輩」

「……あぁ。言ったさ」
その瞬間、Cの血がPにかかる。
「バカだな～。そんな無駄なこと口走るから余計攻撃にあうんだよ？」
そういって無理やりCの体を起こすP。
その不審な行動に目を奪われる翼。
「あのさ、先輩、命乞いする？」
「するさ」
そう答えたときに、顔が近くなる。
遠くから見ると重なっているように見えるほど近くなる。
その行為に思わず目を閉じる翼。
でもそんなことは起きていなかった。
「バーカ。私があんたにキスするとでも思った？」
そういってCの鳩尾を殴り気絶させるP。
そして、そっと翼に近づいて言う。
「あの……さ？さっきのこと、全部聞いてました？」
こくんと頷く。
「あんなこと言った後で恥ずかしいんですけど……」
そういって羽根を出して一枚とる。
「これ、受け取ってくれませんか？」
顔が真っ赤で見られたくないせいか、Pは顔を下に向けている。
その状態が数十秒続いたとき――――――――――――――。
「俺が…もらっていいものなのか？」
その答えに小さく頷くP。
「先輩じゃなきゃいけないです……」
そして、そっと握られている羽根を取る翼にほっとするP。
「先輩……記憶って大事ですよね」
唐突に聞くPに戸惑う翼。
Pは空を見ながら言う。
「先輩……先輩の記憶の中に私がいてはいけないです」

空を見上げているPの頬に涙が伝う。
「は？お前何言ってるんだよ」
涙がずっと頬を伝い落ちている。
「先輩といてすごい楽しかったです。先輩とまともに話せた世界、初めてなんです」
そういって向き直るP。
「乃、乃麻？」
「私、先輩のこと、好きでした」
「何で過去形なん――――――――――」
その言葉が最後まで言い終わらぬうちにPの手が動いた。
そっと翼の額に触れて、記憶を消した。
そして、その記憶を一枚ちぎった自分の羽根の中に入れる。
記憶の量が多いから、羽根は青からとても濃い紫へと変化した。
そして、倒れてきた翼を抱えるP。
その耳にそっと呟いた。
「先輩、乃麻って呼んでくれて嬉しかったです」
そういった後先輩を部屋へ運ぶ。
檸檬に諸事情を話してからさっきの場所へ帰る。そこには先生たちがたくさんいて、その体は血で染まっていた。
「ごめんなさい――――――――――」
それだけ言うと、Pは半獣ならではのマジックでそっと元通りの姿へとかえる。
それを終えると、羽根を出して学園から抜けた。
「バイバイ、翼先輩」
学園を抜け出せた後、Pは自分の記憶をすべて消した――――――――――。檸檬のことも……すべて…。

盈満之咎編（後書き）

ちょいシリアスでした…。
次回もたぶんシリアスで行くと思います

合歓綢繆編

「いったい……いったい何があったのよ」
檸檬が呟く。引き止めるまもなく飛び立ったPの様子からして何もかもがおかしい。
ベッドへ寝かされた翼を見る檸檬。
「何か――――――――――――――――――――あった……か」

◇

Pが学園に姿を現さなくなってからもう2ヶ月が過ぎた。
いつもの様に時が過ぎてゆく。
檸檬もはじめうちは、音信不通になって心配していたが今ではどこかで生きている、ということで勝手に納得していた。
それに、もう翼とかかわっていない。
いつも、積極的に話していたPが消えたのだからもう話す必要性がなくなっていた。

それがある日――――――――――――――――――――。
学校が休みの日に、ちょっと服を着ようと檸檬がクローゼットを探していたときのことだった。
クローゼットを探していると一枚の黒い羽根が檸檬の目に留まった。
その羽根を手にとって見ようと触ると、灰となってハラハラと落ちてしまった。
――――――――――――――――――――この羽根はPの……。
Pから犯行達成の意味でおかれたその羽根をしまっておいたら黒くなっていたのだ。
その出来事で、檸檬はPのことを改めて思い出した。

そして、すぐさま翼の場所へと向かった。

「あ、檸檬」

翼は檸檬が走ってくるのを見ると小さく手をふる。

「せ……先輩……は……ねは？」

肩で息をしながら檸檬が言う。

その言葉を聞いてポケットから羽根を出す翼。

「これ……いったいどうしたんだろうな？気が付いたら持ってたんだ」

その羽根は、透き通っているブルーの色をしていた。

その色は、Ｐから直接もらったとしか考えられない色。しかも黒くなっていないということは――――――――――――――――――――。

「その羽根、もらった？それとも毟った？」

「気が付いたら持ってたんだ」

気が付いたら持ってた――――――――――――――――――――？その言葉に首をかしげる檸檬。

「Ｐは？あれから来たの？」

「Ｐって誰？」

その言葉に目の前が真っ暗になるのを檸檬は実感した。

「だから、怪盗Ｐｉｎｅａｐｐｌｅ！それで乃麻のこと！」

「誰だよ、そいつ」

余計クラクラしてきた。

「私のことは覚えてるんでしょ？」

それには頷く、なのにＰのことはひとかけらも覚えてないのだ。

「今のことＰが聞いたら泣くよ」

「だから誰だよ」

その会話が続いた。

檸檬は翼と分かれると、岬の部屋へと向かった。

そして記憶がなくなっていることや羽根が黒くなっていることを一部始終すべて話した。
「なるほど……」
「先生……P自身がやった催眠法なら私も解けるんです！でもその方法でやっても無駄だったんです。だから別の方法が…」
そういって顔を伏せる檸檬。
そんな檸檬の頭を撫でる岬。
「大丈夫。きっといつかPだって安藤に会いに戻ってくるさ」
「そ、そうですよね！」

そんな会話から1週間たったある日である。
ある日、Pが姿を現した。
能力別クラスの前にひょっこりとたっていた、私服で。
その姿を見つけた檸檬はすぐさま駆け寄って自室へ行った。

「心配したじゃない！どうしたのよ！」
その問いに力なく微笑むP。
「檸檬…さんだよね。心配かけてごめんなさい」
そういって頭を下げた。
その言動や行動に不審を感じた。
「ねぇ、Pどうしたの？私のことは普通に檸檬って呼び捨てじゃない」
その言葉に、アッといって口を塞ぐP。
「ご、ごめんなさい！私、記憶ないんです」
そういって申し訳なさそうな顔を向ける。
記憶がない――――――――――――――？その言葉に翼を思い出す檸檬。
「じゃ、じゃあ翼先輩は？あんたの好きな、安藤翼先輩！」
その答えにも首をかしげるP。

「どちら様でしょうか？」
その言動に酷く落ち込んだ。
しかもおかしなことに、檸檬のことは、『檸檬さん』といったのに対して、翼を聞いたときは『どちら様？』と聞き返した様子を見ると誰かから
自分のことを聞いた可能性が高い――――――――――――檸檬は確信した。
「まぁ、早く寝るに越したことはない！明日一緒にみんなに会いに行こ？」
その言葉に不安げに頷くP。

檸檬のパジャマを着てぐっすり寝ているP。
檸檬は完全に寝ているのを確認すると、Pのポケットを探る。
そこにはあった――――――――――――濃い紫の羽根が。
しかし、1枚しかなくてどこのポケットを探ってもその羽根のみだった。
――――――――――――多分これが翼先輩の記憶の羽。
濃さは記憶の量にはんぴすることを知っている檸檬は、一部の記憶だけ取り除かれた翼の記憶だと判断。Pの記憶の場合たぶん濃さは黒になっている
可能性が高い。
そして、その羽根を握り締めて寝た。

◇

「岬先生～」
翌日檸檬はPをつれて外へ出た。
檸檬の後ろを不安げにあるくP。

「あー檸檬とP！」
檸檬は岬に近づいてそっと耳の近くで囁いた。
「翼先輩の記憶の羽取り戻してきました」
「そうか…じゃあ記憶を戻せるのか？」
「ええ。戻せます」
それだけ言うとニコリと笑った檸檬。
「……岬…先生ですか？」
Pが檸檬の後ろでおずおずという。その言葉に頷く岬。
「もっと、強気で行かなくちゃー！Pらしくないよー！」
そういって背中をバシバシたたく檸檬。
「あ、先生、檸檬ー！」
そういって走ってくる翼の姿を見る檸檬たち。
檸檬は自分たちの場所へ来る前にそっと駆け寄って手に持っていた羽根を翼の額にかざす。
閃光が起きた。
Pや岬が目を閉じた。
次の瞬間記憶が戻っていた――――――

それを聞いて笑う岬。
「そういえばもらってたなー」
「Ｐはみんなにあげてたからねー」
そういって笑う。
「でも私もらったのは『風』の方。『時』は絶対くれなかったよね！『風』をもらえる人はｌｉｋｅ。『時』をもらえる人はｌｏｖｅ。って自分で言ってたじゃん！」
ニコリと微笑む檸檬。
その後檸檬が翼を見る。
「で、もらった？『時』の方のアリスストーン」
そういわれて首を横に振る。
その動作に驚く檸檬。
「でも、羽根もらったんでしょ？」
それには頷く。
「じゃ、二人とも将来を誓った仲だね！！！

合歓綢繆編（後書き）

やっと、P乱心編終了！
次は檸檬乱心編です！

切磋琢磨編（前書き）

これから先は、檸檬乱心編です。
前回とは、違う世界なのでよろしくお願いいたします。

切磋琢磨編

貴女と私が出会ったのは幼少の頃だった。
行く当てもなく、公園の端に小さくうずくまっていた私に貴女はまぶしいくらいの笑顔を向けてきたのを今でも鮮明に覚えているよ。
「家でもしたの？」
その言葉に私はどうしても耐え切れず涙を流した。
――――――――――――――――――家を追い出された、なんていえるはずがなかったから。
「どうしたの？」
そういってくる貴女は、私にとっての星だった。小さく光るその笑顔。
「行くあてがないの」
そういった私に貴女はにこりと微笑んだ。
「うちにおいでよ。歓迎するわ」
そういって私に手を差し伸べて貴女の家に向かった。

翌日私は貴女に黙って『怪盗』となった――――――――――――――――――――。
いつか、貴女を助けるために……。

「岬先生〜！」
檸檬が背後から岬を抱きしめる。
「……おっと。檸檬かー」
「えへへ。おはようございますっ」
そういって檸檬は笑顔を向けた。
「ったく、朝から元気がいいな〜」
「先生から元気吸い取っちゃってるんですよ〜」
「吸い取るなよー」
「あははっ」
毎朝この風景画定番になっていた。
怪盗が現れなくなって早1ヶ月。檸檬も毎晩電話をかけているが全く繋がる気配がない。
『音信普通』状態だ。
怪盗も怪盗で街へ出て何かを盗んでいるのだろう、と檸檬は解釈していた。
怪盗といっても彼女はまだ中1。学問に励んでいるのだろうか？
季節は秋。
学園祭の季節が近づいてきた――――――――――――――――――――。

◇

「瀬綿さんは奈緒のいるところで個人レッスン！」
その声がダンスルームに響いた。
怪盗が通う中学である。中高一貫性のこの学校では高校生と中学生がともに同じ部活をするという異様な風習があった。
亜理沙部活が同じだけましか――――――――――――――――。
もうすぐ三枝学園の学園祭。ダンス部は、学園祭という大きな舞台で踊るのだ。
そんな重役を中１にも任せるなんて無責任ではないのか――――――――――――――――――怪盗こと瀬綿乃麻がそっと思う。
瀬綿乃麻と言う名前は実際本当の名前ではなく親しい人や先輩のみ知っている『偽名』だ。
夜は、怪盗という職業をこなし、昼間は部活に励むという過酷な日々が続いた。
それに、乃麻がダンス部に入った理由はひとつ。体をやわらかくしたいからだけなのだ。
別にヒップホップが踊れようがジャズが上手くなれようがそんなのはどうでもいいことだったのだ。
体をやわらかくしたら、いつか自分が踏み入れてはいけぬ『あの場所』へと踏み入れる事が可能になるから。
それを胸に秘めて毎日練習に励む日々。
そしていつか踏み入れられることをひたすら願い、佐藤先輩と倒せぬ敵と戦っていた。

「あ～。やっと終わったよ」
同じ部活友達の萩原亜理沙が伸びをする。
「そうだね～」
乃麻が弱弱しく微笑む。先輩とすれ違うたびに交わす、『ありがとうございました』の言葉がなんだか無性につらい。
そのとき後ろから声をかけられる。
「乃麻ー！！！！！！！！」
乃麻が振り返るとそこには、中2で先輩である宮内楓がいた。
「宮内先輩！」
その様子に、亜理沙が訳あり事情？と小さく聞いた。
それにすぐに首を横に振る乃麻。
「私の片想いだから」
そう小さくつぶやいて視線を楓に戻す乃麻。
「先輩、今日は何で学校にいるんですか？」
そう聞く乃麻の顔はもう疲れた顔などではなく、満面の笑みだった。
「ん？今日は補習だよ。乃麻みてぇに頭よくねぇから」
そういって乃麻の額を軽くつつく。
「じゃ、またな」
そういって走り去る楓の姿を乃麻は見えなくなるまで見つめていた。
「彼女もち？」
「ううん。先輩は未だ彼女作った事ないってさ」
そういって笑顔を見せる乃麻にやれやれという感じに首を横に振る。
「亜理沙はいいよね、なんたってあんなにモテる人が彼氏なんだから」
歩きながらぶつぶつと乃麻が言う。
「乃麻の理想は高いんだよ。何で中2しかダメなの～？」
そう言われて頬を膨らませる乃麻。
「いいじゃん！！！過去の経験から言ってるの！」
乃麻の本気を感じられた亜理沙は、ためいきをひとつもらしたあとにそっと言った。

「はいはい。頑張って、宮内先輩ゲットしてね」
「うんッ」
明るい夕日をバックに二人は笑いながら家路をたどった。
その途中である、同い年、あるいは１つ上くらいの人と乃麻の肩がぶつかった。
「ご、ごめんなさい！」
一瞬振り返りその人を見た。
するとその人は、さわやかに笑って
「あぁ。君こそ大丈夫？」
そういってくれた。
「へ～優しい人でよかったじゃん。乃麻がキレたらここら辺の窓ガラス割れちゃうよ」
そういって笑う亜理沙
「うわ、それ酷～い」
楓先輩みたいだったな――――――――――――――――――乃麻はぶつかった事も忘れてただ追憶に浸っていた。

「じゃ、また明日ね」
電車の扉が開き亜理沙が下りた。
「うん。また明日いつもの時間ね」
そういって二人して手を振る。
電車が閉まった。亜理沙が見えなくなるまで手を降った後、小さくため息をこぼして携帯を開く。
ディスプレイに表示されている不在着信を見る。
軽く１０件は超えてるな――――――――――――――――――――――――――――。
かけてきた相手は、檸檬だった。

ため息をついてそっと『削除』の項目を押す。
毎日１０件近い着信。
最近檸檬に会ってない、とは思うけれど忙しい。乃麻は複雑な気持ちになった。
けれど、そんな悩んでいる暇はない。
間近に迫った講演会を成功させるため、楓先輩と仲良くなるための方に必死だった――――――――――――――。

切磋琢磨編（後書き）

次回なるべく檸檬×岬を出したいです…。
もしかしたら、楓×乃麻かも…。

嫣然一笑編

俺とあいつが出会ったのはいつだったか。
小学校低学年の頃、自分より小さな人間が電柱に立ち、風でなびいている純白マントを見たような気がする。
そして、中学生になり俺は、瀬綿乃麻という人物に出会った。

「みっやうちせんぱーい！！！！！！！！」
１０ｍくらい先にいる楓に向かって乃麻が叫ぶ。思わず楓は足を止めて振り返った。
そこには片手にノートを持ってもう片方の手で大きく手を振っている乃麻にニコリと笑顔を向ける楓。その隣にはもちろん亜理沙がいる。
勢いよく走る乃麻。それを後から呆れたように追いかける亜理沙。
「先輩っ、こんにちはっ！！！」
そういってお辞儀をする乃麻。
「はは、乃麻は元気だなー。今日も部活なんだろ？しかも、嫌いな奴らがいる」
その言葉に一瞬、一瞬顔をしかめる乃麻と亜理沙。
「平気ですよ！先輩も補習頑張ってくださいね」
「今日は補習じゃねぇーよ！」
そういって乃麻の額をまた軽くつつく。
「すみません…。なーんか先輩には補習が似合うな～って思いまし

て♪」
そういわれて楓は乃麻の頭を軽くたたく。
「いてっ」
「俺のこと、バカっていいたいのかよー！」
「そんなわけじゃないんですよ～。先輩は、頭いいですよ」
そういってニコリと微笑む乃麻。
そのとき向こうから誰かが
「楓ー！」
と呼ぶ声。その声に、
「すまん！行くな？」
「あ、はいっ」
笑顔で手を振る乃麻。
「ねぇ、なんであんな奴がいいわけ？」
「……あんな奴って言ったらいーくら亜理ちゃんでも殺すよ～？」
そういう乃麻の目には本気で殺気が感じられてすぐさま謝る亜理沙。
「ゴメンゴメン！」
「……ま、許してあげる、亜理ちゃんだしねっ」
その言葉と笑みにほっと胸をなでおろす亜理沙。
亜理沙は自分に向けられている笑みと楓に向けられていた笑みが大きく違うことを知っていた。
乃麻の育ちがとても酷いものだということは噂で聞いたことがある。
だからだろうか、心をいまだに開こうとしない。
自分は一応開かれていると思うっていたが、楓とは比べ物にはならなかったことに少々哀しくなる。
楓といるときはものすごい感情のこもった笑顔をするが亜理沙自身に笑顔を見せるときは感情的に笑っていない。
でも、クラスメートや先輩には笑顔を見せていないためちょっと優越感があった。

◇

「岬先生……会いたいよう――――――――――――――」
苦しそうに檸檬が呟く。
そう今檸檬は熱におかされているのだ。
本当は学祭のために準備などをしたいのに、熱が出ていたらできるはずがない。
それに、一番苦しいのは、岬に会えないことだった――――――――――――――。

しかし10分後檸檬の思いが通じたのか岬が部屋に来た。

「檸檬～？入るぞ～」
その声にドキリとする檸檬。わざとか細い声で
「はい……」
と答える。

ガチャ

という音とともに岬が部屋に入る。手にはフルーツバスケットを持ち。
「檸檬、大丈夫か？」
「……先生っ」
涙が檸檬の頬を伝う。それに驚く岬。
「す、すまん！檸檬も一応女…だしな。勝手に入るのは…」
慌てふためく岬にそっと笑う。

「…先生が来てくれたことが嬉しくて…」
そういって涙を拭いてニコリと笑った。
「……これお見舞いのもの。食べれば熱下がるよ」
そういって笑う岬にドキリとする檸檬。
「あ、ありがとうございます！」
そっとそのバスケットを受け取り優しく笑う檸檬。

――――――――――――――――――こんな優しい世界初めて…。

檸檬は幾度となく世界を繰り返してきた、乃麻とともに。
しかし、熱を出したことなんかなかった。それに岬が部屋に訪れたことも。
それに、乃麻とのこんなにも音信普通が続いたことも――――――――――――――――――……。

今回来た世界は変だ――――――――――――――――――……

檸檬はそっと目を閉じた。
今まで繰り返されてきた世界では、殺し合いがつき物だった。たいてい、岬か乃麻が殺される。
他殺の場合が多いが、稀な世界だと疑心暗鬼にかかった乃麻が無理やり岬や檸檬の前で腹を切って自殺するということもあった、幾度となく。

「熱で、私が死ぬのかな…」
気が付くと声に出していた檸檬は言った後に口を塞ぐ。
「――――――――――――――――檸檬？」
その言葉が岬の口から発せられた時にはすでに檸檬は泣いていた。
「殺され……るんです」
そういって頭を抑える檸檬。

「乃麻……か…岬先生が――――――――――――――」
その言葉を聞いて岬が檸檬を不意に抱きしめた。
「俺が――――――――――檸檬のことを守るから。殺されても……お前のことだけは守るから」
その言葉を聞いて少し安心する檸檬。
「でも……それでも変なんです！この時期…普通は教師暗殺事件…や連続他殺死体発見事件がおきてるはずなんです！！！！！変なんです！それに、乃麻が
翼先輩に会いにこないことも変なんです！！！！！！！」
そういう檸檬をよりいっそう強く抱きしめる岬。
「……せ、んせ――――――――――――」
気を失う檸檬。そっとその体をベッドへ寝かせる。

「早く、よくなれよ」

それだけ言い残して部屋を後にする。
そしてそっと翼の部屋へ向かった。

「怪盗P、知ってるか？」
翼と合流した岬はそっと聞いた。
「え？誰ですか？」
「じゃあ、何か盗まれたか？」
「いえ、なんも盗まれてませんけど…？」
「……！話はそれだけだ、学園祭期待してるぞ」
「あ……はい」

岬は部屋に独りになるよく考えた。
檸檬が言っていたことは信用できる。しかし不可解なことがたくさんある。

連続他殺死体発見事件や教師暗殺事件――――――――――――？過去の記録を調べたがそんな記憶はなかった。
でも優等生の檸檬が熱くらいで変になるはずがない。
ここはひとつ、檸檬を信じてみるか――――――――――。
それか、怪盗を呼び寄せてそいつに事情を聞くか。
ちょっと、怪盗でも呼び寄せるとしよう。あいつならすべてを握っていると思う――――――――――――……。
岬はそっと決意を固めた。
愛しい人を守るために。

嫣然一笑編（後書き）

次は多分岬×乃麻
それか、乃麻×翼
だと思います

滄桑之変編

無限の悲しみを背負った少女二人。
この悲しみを味わう事は出来ない――――――

◇
「今日彼氏と帰るんだ」
いきなり亜理沙が言う。その言葉にそっと悲しみの顔を見せる乃麻。
「そっか。じゃまた明日ね」
「ゴメン。じゃ明日」
そういってサッカーゴールのところに座っている亜理沙の彼氏に向かって亜理沙がかけてゆく。
その姿をずっと見つめている乃麻。

下校途中の坂で見つけた楓に向かって走る。
「宮内せーんぱい」
「わっ。な、なんだ乃麻かよ〜。よく驚かされるな、俺って」
そういってクスクス笑う楓を愛しそうに見る乃麻。
「一緒に帰ってよろしいですか？」
「あぁ、一緒に帰ろうぜー」
そういって隣をそっと歩く乃麻。
「先輩って東京住みでしたよね？私東京行ってみたいです！！！！！！！」
その言葉に驚きながら笑う楓。
「来いよ。歓迎するぜ」
「わぁい！！！！！！！！先輩ありがとうございますッ」
その答えに少々不満げな表情を見せる楓。
「お前さ〜、何で敬語使うわけ？ぎこちなくね？」
そういって急に立ち止まる乃麻。
髪が風になびく。
「――――――――――――――――『先輩』だからですよ」
そういって顔にかかった髪をよける乃麻。
答えを聞いた後にそっと乃麻のところへといく楓。その手を取って言う。
「『楓』って呼べよ。堅苦しく宮内先輩なんていうなよ」

顔を真っ赤にする乃麻。
「え、でも佐藤先輩から言われた事ですので――――――――――――。それに図々しいですし」
悲しそう笑顔を見せる乃麻。
「へー。ダンス部って厳しいんだな～。ごくろーさん」
納得してくれた事に乃麻はそっと安心した。
そっと歩き出したときにはもう二人の顔には笑顔が戻っていた。

「ここが東京ですか～」
「初めてきたのかよ？」
驚いた様子で乃麻を見る楓に頭をかく乃麻。
「こんな東京っていえる東京に来たのは初めてなんです…」
「じゃ、俺が案内するしかないな。行くぞ！」
「ま、待ってください！」
そういって先を歩く楓を追う乃麻。
夜だから家路をたどるサラリーマンが多くて一度見失うと大変だ。
しかし不幸か幸いか乃麻と楓ははぐれた――――――――――――――――――――。

「の、乃麻！？」
楓が叫ぶ。

「せーんぱぁい――――――――――――――――――――…」
その声をたまたま聞きつけた岬が乃麻を探す。
茶色の髪をして赤い目をしている少女を見つける。そして、その腕をつかむ。
「……チッ」
つかんだ人が岬だと分かると乃麻が舌打ちする。
「怪盗……だろ。学校まで来てもらおうか」
その瞬間岬のこぶしが性格に乃麻の鳩尾に来る。
痛みとともに意識が遠のく乃麻。
向こうで乃麻の名を呼ぶ楓の声が聞こえていた。

◇

「……おきたか」
「手荒な真似するんですね、岬先生」
そう。
今岬の部屋にある椅子に縄でくくりつけられているのだ、乃麻は。
「聞きたいことがある。わが学校へ入学してくれないか」
「――――――――――――――――――――――――――――イヤだ、と断ったらどうします？」
「さっきの奴に危害を加える」
その言葉を聞いて乃麻は軽く震える。

「年、いくつだ？」
「……12。中1です」
そういう乃麻の目は泳いでいる。
「じゃあ、中1として入ってもらう」
「聞きたい事はココで言えるのでは？」
その質問に顔をしかめる岬。
「いや……」
「そうですか。いつ、私を迎えに来るんですか？」
「明日――――――――――――――」
明日と言う言葉を聞いて乃麻はビクりとする。
「講演会があるんです。それまで待っていただけないでしょうか？」
「いや、アリスが使えると分かった時点で……」
――――――――――――――――隠してきた事が全てバレているのは檸檬のせいか…
「分かりました。条件飲み込んでくれたら着ます」
「何だ？」
一瞬ためらった後岬が言った。その言葉を聞いて安心したように口を開く乃麻。
「宮内先輩に危害を加えないで下さい。それと、他の先生方や生徒の人たちには偽名も教えずにただPと紹介してください」
「あぁ。約束しよう」
「明日のいつ、迎えに来るんですか？」
「夕方――――――――――――――――――――だ」
その契約を終えたPはそっと飛び立って行った。

◇

「瀬綿さんが急遽転校する事になりました――――――――――――――――」
翌日学校へ行くとＨＲで先生が言い出す。
ちらほらと顔を伏せる人がいる。
黒板には『乃麻ありがとー！！！！！！！！！！』の文字。

たくさんの人から、プレゼントをもらう。
教室の後ろにあるロッカーの上には、乃麻のまとめた荷物が置いてある――――――――――――…。

別れまであと１５分。部活が終わる。
あの佐藤先輩からも『ダンス部メンバー忘れるなよ』の言葉をもらえて内心喜ぶ乃麻。

そして、別れまで５分――――――――――――――――

「……はい！」
リムジンの窓から岬が顔を出して言う。
「早く、乗れ」
その声と同時にそっと乃麻が背伸びをして楓の肩に顔を埋める。
「気づいてくれてありがとうです――――――――――――――――。
楓先輩っ」
それだけ言うと、そっとリムジンへ乗り込んだ乃麻。
リムジンへ乗り込んだときには既に廃人の目に戻っていた乃麻を楓は苦しい気持ちで見送った。

悲歌慷慨編

まわるまわる、この世界――――――――――――――――――――。

「なぁ、P？」

岬が外を無言で眺めている乃麻――――――――――――――――――――いやPに囁く。

「私、記憶消しますね。そうだ、性別男として編入します」

「き、記憶消す…って」

そういったときには、到底解けない催眠術をかけているPがいた。

それを悔しそうに見ている岬。こいつの意思でやっていることを阻止する事は出来ない――――――――――――――――そう思ったのか全く手出ししない。

数分後、術をかけ終わったのか急にパタリと倒れるP。

「――――――――――――――――今日は休め」

学園に着くと、一応星３つの部屋へ運んだ、荷物とともに。

「初めまして」
廃人のような顔で転校スピーチをするP。
既にその性別は男となっていた。声も顔も……。唯一変わらないのは、身長。
「よろしくお願いいたします」
それだけいって指示された席へ向かう。
先生からいろいろな事を指示されるが全く耳に入っていなかった。
それに、いやになって2時間目からはサボっていた。

生えている木にそっと登って生徒が移動する様子を見ている。
木の上だからだろうか、先生も時々くるがバレる気配がない。
それに今は、Pは男じゃなく女の姿に戻っていた。
頭に思い浮かぶのは、楓の姿のみ――――――――――――。消した記憶の中で消しきれなかった記憶だ。
「……先輩」
涙を伝うその頬は赤く染まっている。

まだ可能性があるとしたら、脱走したい。

◇

いつものようにお気に入りの木の上で変装を解いていた。
そのときいきなり声をかけられた。

「そこの転校生ー！」
転校生だという事を知っている？――――――――――――Pはそっと疑問に思う。
「学年は？」
前の学校にいたクセでそっと学年を聞いてしまった事に後悔するP。
こういう場合は大抵名前を聞くものだと
分かっていたのに――――――――――。
「え？中2だけど？」

中2という言葉を聞いて真っ先にアノ言葉が出る。
「せ、先輩――――――――――――！！！

ない。
「先輩、私にかかわらないで下さいね」
「は？」
「目の前で殺人が行われるのは残酷ですから」
そういってそっと立ち去ろうとした瞬間。前のように影を捕まえられる。
「……離してください」
あの目で睨む。
「なんだよ…殺人って」
「離してください。話してくれなきゃ殺しますよ？」
そういわれて一瞬ひるんだ隙を見てそっと空へ飛び立った。
「あいつ……どこかで見たような」

◇

部屋に帰ると、そのまま泣き伏した。
ずっとずっと――――――――――――――。
何にも悲劇は起こっていないはず。
誰もまだ殺していないはず。殺されていないはずなのに、それと同じくらいに値するほど悲しい。
涙が――――――――――――――大粒の涙がこぼれる。
「か…楓先輩が逢いに来て…くれるもん」
その言葉を繰り返し、涙を止めた。
翼先輩を好きになっちゃいけない。
悲劇を食い止めなきゃいけないから。

自制してきたつもり。だけどあんな優しい顔見たら……。
助けて…。自制無理だよ…。
私を助けて――――――――――――――――。

悲歌慷慨編（後書き）

シリアスですねー……。
次回はコメディーに出来るよーに努力します……。

流転輪廻編

――――――――――どうか泣かないで。
僕のせいで君を泣かせたくないんだ――――――――――……。

◇

「泣くなよー。俺はお前が泣くのを見てられないんだよ～」
檸檬がそっと口調を真似て言う。
「…似てない！」
赤い目が余計赤くなる。
「……仕方ないじゃん！私はあんたと違って変声機がなきゃ声かえられないんだから！」
そう言って軽く拗ねる檸檬。
「いいじゃん。あんたはいつの世界でも岬先生とラブラブなんだから！！！！！！！」

その言葉に顔を真っ赤にする檸檬。
「ったく。私はいつになったら幸せになれるのだか…」
そういって深いため息をこぼす。
「ただつかもうとしてるだけでしょ。あんたさー、この前せっかく返事されようとした瞬間……」

そう。
この前は、桜の木の下でせっかく返事をしてもらおうとした瞬間、Pが
「私は幸せなんかつかめるはずがない！！！！！！！！そうでしょう？つらい思いなんかしたくない！！！！！」
疑心暗鬼にかかり勝手にみんながいる事も忘れて、短刀で自分の腹を切り裂き死んだのだ。

「……！あれはつらい思いをしたくなくて…。」
そういってあわてるP。
「みんな集まっていきなり『ごめん。嫌い』なんていうバカな奴いるかよー――――――――――――。せっかくあそこまで悲劇起こらなかったのにさ～。バカ！！！！！！！私なんてせっかく岬先生から求婚されたんだよ？」
それにひたすら、『ごめんなさい』と低い声でつぶやくP。
「わ、わ、ゴメンゴメン！こっちの世界でも成功させよ、ね？」
「成功…出来るかなぁ？だって私思いっきり『私に近づくな！』って言ったよ？」
それに檸檬もさすがに黙る。
「……宮内でいいじゃん」
「み・や・う・ち先輩だよ？」
先輩のところを強調して言うP。
その目に殺気が募っていることを恐れて言い直す檸檬。
「でも何で今回の世界で乃麻が今まで眼中になかった宮内先輩に惹

かれたんだろう？」
それを聞いて悲しい顔を見せるＰ。
「幸せを、掴みたいからじゃないかなぁ？気がついたら目の前にあの人がいたから」
「へぇー。あんた一途じゃなくなったね」
「ん？そうかな？」
そういってアハハと笑うＰ。
「とにかくこの世界じゃ成功させるよ？」
「……それは、安藤先輩を好きになるなってことだよね？」
その目に殺気が見える。
「岬先生とっちゃお☆恋愛できないのなんてつまんないもんっ」
「や、やめろ！！！！もー、普通に抱きついちゃえばいいじゃん」
「勝手なこと言うなバカー！！！！！！！！」
お互い真っ赤な顔を見て笑う。
「幸せだね～」
「そうだね……。ほら、岬先生に抱きついて来い！」
「ＯＫ～」
「え？マジで？」
そういったときにはすでにＰの部屋のドアのところまで歩みよっていた。
「バーカ。早く着てよッ」
その言葉にそっと笑みを浮かべて近づくＰ。
そして、近づいて耳元で囁く。
「さようなら、って先輩に伝えておいて」
「何言ってるの？今からその先輩に逢いに行こうとしてるんじゃ――――――――――」
その答えにさっきのしんみりさがさっぱり消えてＰの顔に笑顔が戻る。
「じゃ、いく～」
「……気ィ変わりすぎ」

「レッツゴー！！！！！！！だって……やるだけのことやらなきゃそれこそ悔いになっちゃうよ」
「え？今なんて――――――？」
「ゴーゴー！レッツゴー！！！！！！！」
しかし行く事はできなかった――――――。
行こうと試みた瞬間、Ｐの部屋に岬が来た。
「Ｐ。客、来てる」
「はぁい」
「先生は……？」
「檸檬？」

◇

教えられた場所へ行こうとした瞬間、呼び止められるＰ。
「あ、安藤先輩ッッ！！！！！！！！！！」
その姿に顔を赤くするＰ。
「思い出した、乃麻だろ！！！！！！！！！！」
「お、……思い出してくれたのですかッ！？」
「腹……大丈夫？」
こんな世界初めてだ、と檸檬は言っていたがこういうことか――――――――――。
「あ、はい。世界が――――――――――違うんで。じゃあすみま

せん！」
一方的に分かれて目的地へと足を運んだ。

「み、宮内先輩！？」
目の前いたのは宮内先輩だった。
なんだか、とても複雑な気持ちがPを取り巻く。
「乃……麻。やっと、逢いに来れたー！！！！！！！」
そういって喜ぶ先輩をみて余計複雑になる。
「……俺さ、また来ていいかな？」
その答えにはうなずく事しか出来なかった。
「そっか、よかった。じゃ、今日はこれから塾なんだ。ゴメンな」
そういって頭を撫でてくれる。目を瞑って終わるのを待つ。懐かしいな…。

帰るときその姿を見ていた。
「あれ誰？」
後ろから声をかけられた――――――――――――。

臥竜鳳雛編（前書き）

今回は、檸檬的空模様番外編？です

臥竜鳳雛編

――――――――――――――――空には無限の可能性がある。

「空は……綺麗だねッ！！！！！！！！」
林檎が直に向かって叫ぶ。
そこには快晴の空が広がっている。梅雨の季節の合間に見せる太陽はここぞとばかりに地面を照らしている。
「病気なんて、忘れちゃうよ～」
林檎は、重い病気にかかっている。もう命の期限は切れているはずなのだが奇跡的に生きている。
だから、いつ死んでもおかしくないほどだ。
直はそんな林檎の幼馴染でずっと林檎のそばで応援してきた。
「おめーまたしかられるぞ？」
「いーのいーの！！！！！！！この空見なきゃ死んでも死にきれないよ！」
「……俺、補償しねーよ？」
「直はいちいちうるさいんだよー。昔からおせっかいなんだよ」
拗ねた様子を見せた後すぐに目線を空に戻す林檎。

「何で、私たち一緒にいるんだろうね～。神様、のお陰かなぁ」
「は？お前高校生になって、神様、かよ」
あきれた様子で直が林檎に言った。
「だって私が2年も生きているのは、神様の気まぐれのお陰でしょ？」
「へー」
「というか高校は？」
「抜け出してきた。お前がいつ逝くかわからねーだろ？わざわざ来てやってる俺のみにもなれよー」
そういって笑う直。
「はいはい。ありがとね。そろそろ戻らなきゃ」
そういってくるりと向きを変えて病院の入り口へと向かう林檎の後を追う直。

「……林檎が死んだ？」
あっけないことだった。
空を見て、ちょっと直が缶ジュースを買いに出かけていったときに……。
「つい先ほど――――――――――――」
林檎のかかりつけの医者がメガネをかけなおす。
林檎の両親や直の両親も駆けつけている。
「……――――――――――――――ッ」
直は手に林檎が好きなソーダを持ちながら病室を飛び出した。

「あいつ……」
最期を看取るつもりでいた直は外へ出て思い切りソーダを飲み干した。
「バカヤロー！！！！！！！！！！」

ポツ…

さっきまであんなに晴れていた空がどんよりと曇り空へ変わり、雨が降り出した。
――――――――――林檎……

病室へ戻ると林檎の親に封筒を渡された。
「何すか？」
「これ……林檎が君宛にかいた遺書だ。絶対秘密、と書いてあるから私たちも読んでいない」
それだけ言って封筒を突きつけられる。
見られてはいけないことを林檎が書くわけないが俺は病室を出た。
女が使いそうな、キャラクターが彩られている普通の封筒。
そっとポケットから短刀を出して封を切る。

手紙を取り出してそっと読む。

『直へ
こんな病弱な幼馴染でゴメンね。色々直に迷惑かけちゃった。
そろそろ私死んじゃうな……。夢のお告げでそうきたから。
でね、私直にやってほしいことがあるんだ。
ずっと小さい頃に直が私にくれた絵本にあった、怪盗。
私、怪盗になりたかったの。
でもこうして死期を迎えるから……。
直が変わりにやってくれないかな？

一人じゃなくて、仲間とたくさんワイワイやって――――――――――。
そしたら私成仏できると思うよ！
直ならできる！いや、やって！
ＰＳ．
大学受験がんばれ！ファイトー！
林檎』

綴られた文字が林檎の思いを伝えている。
俺は、怪盗となることを決意する。
林檎の代わりに――――――――――。あいつのために。
伝えきれない思いを乗せて。

◇

林檎の死から何年たっただろうか。
俺は今、林檎の名前からとって、怪盗Ａｐｐｌｅとして生計を立てている。
最初は大学の仲間に声をかけたのだが断られていた。
しかし、逆に知り合いより知らぬ人のほうが怪盗に興味があったらしく今じゃ仲間に恵まれている。
それに、とあるビルを借りたお陰でみんなそこで部屋を持ち家に帰る必要がない。
「ちょっとＡ！早く承諾印押してよー！！！！！！！！」
バンバンと俺のデスクをたたくＲａｓｐｂｅｒｒｙ。こいつは、ｌ

ｉｍｅが小さい頃が拾ってきた奴。
「は・や・く！」
「ほらよ」
「ありがと～」
怪盗として何が必要か、俺自身色々他の仲間に教えているがよく分からないままだ。
一番、理解してるのは林檎なんじゃないか――――――――――――――――――――。
そっと窓の外の空へ目をやると、
雲ひとつない快晴だった。

林檎、お前ちゃんと見てるか？

臥竜鳳雛編（後書き）

久しぶりの短編です。
別名、怪盗Ａと憂鬱（（笑

屍山血河編

助けて……あげられなくて、ゴメンね、檸檬――――――――――。

「ん？楓せーんぱいだよっ？」
くるりと振り返ったそこには、前の世界ではP同様いてはいけない、Cがいた。
「あ、山下先輩っ」
そういって耳元へ囁く。
「仕事、順調ですか？」
「あぁ」
その言葉に安心の笑みを見せる。
「じゃ、またっ」
そういってすぐさま、彼、を探すP。
追いかけようとして途中で足を止めるC。
「安藤先輩ッ♪」

「うわっ。乃麻……」
「あれ、今回は反比例？そっかぁ…。じゃあ比例に買えちゃいますね～」
「は、ん比例？」
そっとPが彼の肩に顔を埋める。
「ちょっと、戦いに備えていいですか？未練この世界で残したくないんです」
その状態が１０分くらい続く。
みんなからの視線とかが激しく気になるけどそんなのどうでもよかった。
「……ありがとうございました～。本当、先輩がいると殺りやすくなるです！」
そういってかけていった。

Pはそのまま、岬の部屋へと足を進めた。
「あ、P」
その声に小さく微笑むP。
「忠告。そろそろ惨劇が起こる。あなたを巡って――――――――――――――。多分、今日からおきるようなきがし」
「何、やってるのかな？」
低い声が背後から聞こえる。
「れ――――――――――――――」
「何、やってるかって聞いてるの」
その目はPと似て廃人のような目をしていた。
「忠告」
「へ～。嘘だ」
嘘だ、と呟くとき顔がすごい剣幕になる檸檬に驚く二人。
「何？私と殺る気？」

「えぇ」
その言葉にゾクリとする岬。
二人のにらみ合いが続く。
「岬先生は、私だけのもの」
「だから私は手、出してないよ」
不適笑うPの顔に不満を感じそっとその場を離れる檸檬。
「岬先生、逃げて！！！

る音がする。
「どっちが僕らの敵？」
下で生徒達が話す。
「多分……あのハンマー持ってる人」
その声に惑わされた檸檬が直でPのハンマーを受ける。
その頭から血が流れる。生徒達が目を伏せる。
「痛いな～。手加減しなよ」
そういったときには、檸檬の手はPの首にある。苦しそうな表情一つ見せないで余裕の顔をしているP。
だんだんと力を入れる。
さすがに苦しそうにするP。
暴れるけどさすがに抜け出せない。その瞬間――――――――――。
檸檬の背中から血が流れる。後ろに逃げ出そうとしていたPは手を放されたとき思い切り後ろへ飛んでゆく。
「や、ま下先輩！」
背中を無理矢理抑える檸檬。その表情は青ざめしていた。
「半獣二人なら勝てるだろ？」
バサリと羽根を出すCに小さく笑顔を見せるP。
「万能を司る私に勝てるとでも――――――――――――？」
「アハハハハハ……。半獣一人と万能一人で互角だよ？半獣二人いたらボロ負けじゃない…」
そういっている間でも戦いは繰り広げられている。
ハンマーとピストルを使って攻撃するP。とにかくアリスを使う檸檬。
「私を殺す事は不可能。だって生き返られるもん」
その言葉に動きが一瞬止まるP。
その隙を狙って水柱に閉じ込める檸檬。水の中のため息が出来ない。
でもそんな技もすぐに終了。
時を止めて水柱から脱出するP。

「忌々しい時使いめ！」
そういって睨む檸檬。
「あんたの方が忌々しいんだけど」
そういって発砲するP。
「やめろ、乃麻――――――――――――！！！

「アハハ……。神よ！！！

屍山血河編（後書き）

次は多分C，P乱心編です

適者生存編（前書き）

またまた、檸檬的空模様とは離れています、、、

適者生存編

「沙菜、これお父さんの会社に届けてくれないかしら？」
母親のその声で私は読んでいた本にしおりを挟みパタンと閉めた。
「え、そんなの母さんが行けばいいんじゃない」
今は夏休み。
もともと本を読むのが好きな私は、課題図書すべてを読もうという無謀な計画を実行中だ。
「今から買い物行かなきゃいけないのよ。それにあんたの本買うためにね」
――――――――――――――――仕方ないな。本と成績のためだ。
「しょーがないわねー。青井沙菜様が行ってきてあげるわよ」
少々高飛車な態度をとる私。母さんは困ったように届ける荷物の入った袋を私に手渡した。
「ほら、日、くれないうちに早く行きなさい」
「はーい」
私は自転車を出して錠をとく。
ふと、空を見ると曇っていた。さっきまで晴れていたのに――――――――――――。
雨が降るかもしれない、早く用事済ませて帰らなきゃ。

村といっても変ではない辺鄙なところにすんでいる青井家。
でも、村の人たちはみんな顔見知りだし困ったときはみんなで協力する。
まぁ、街にあって村にないものを述べよ、なんていう問題があったらすぐに『人の温かさ』って私は答える。
だからこうやって自転車で走ってる間も、近所のおばさんとかがニ

コリと笑って挨拶をしてくれる。
街にはない、と街の学校の友達は言っている。
すれ違う人がみんな顔見知りなんかじゃないって、言ってた。

父さんは、そんな大都市圏まで働きに行ってくれている。
だから結構給料は高い。私も周りに比べてお小遣いが高い。でもまぁ、洋服とかそんなにもってないし、化粧もナチュラルだ。
友達と大都市に遊びに行くときはばっちりメイクしていくけど。
自転車を駐輪場へ止めて電車に乗る。
久しぶりの電車。この前粘ってあった広告ももうさすがに取れている。

ガタン、ゴトン

その電車に揺られていると、車内案内放送が流れる。
もう父さんが勤める会社の近くの駅――――――――――――――――――――。

◇

「あら、沙菜ちゃん！久しぶりね～」
受付にいるお姉さんが笑って私を出迎えてくれた。
広いオフィス。筒抜けになっているこの空間が私のお気に入り。ココに来ると、『あぁ、大都市もいいな…』って思う。
「今日は父に届け物を…」
「ちょっとお茶しない？」
受付のお姉さん――――――――――――――――――――菜波さんがそっと私をお茶に誘ってくれた。

「ここの紅茶おいしーのよ♪」
そういってウェートレスに注文する菜波さん。
私も同じ紅茶を頼む。
数分後その紅茶が美味しそうな香りとともに運ばれてくる。
「お仕事大丈夫なんですか？」
「ん、あぁ平気よ♪部長の娘さんだもん」

肩書き、ってあるとき突然ぶっ飛ばしたくなる。
「ん～美味しー」
そういって紅茶を飲む菜波さんを見ながらかれこれ考えた。
――――――――――――――――多分、今日いやなことが起きるかも…って。

「沙菜ちゃん聞いてる？」
顔を不意に覗き込まれてビクりとした。
「あ、ごめんごめん」
私はあいまいに笑う。
「はは♪なーんか沙菜ちゃんボォーってしてるよね、ほわわーんって感じがするよ？」
「そうですか？」
ちょっと紅茶を飲む。
その甘いのみ心地にどこかへまっすぐゆっくり落ちてゆく。
「美味しいでしょ？ここ私のオススメなんだよ」
「あ、はい。とても美味しいです」
私はすぐに飲み干した。
「じゃ、部長に用があるんだよね？いこっか」
絶対、会計私がやる――――――――――――――といってくれた菜波さんにおごってもらい外へ出る。

「じゃあ、また後で」
そういって子どもみたいにブンブンと手を振ってくれている菜波さんにペコリと頭を下げてその場を去る。
7階だよね…。
私はエレベーターを使わずに階段を上る。
なんかエレベーターって人が多いし、痴漢にあいそうで怖くて未だにあまり好まない乗り物だ。
それにこんなオフィスじゃサラリーマンばかり…――――――――――――。

私が階段を上っていると急にガクンと振動が来る。
これってもしかして

――――――――――――地震！！？

上から悲鳴が聞こえる。
一気に駆け下りてくる人々。その波に流されるように私も降りる。
途中息が切れて私はそっと踊り場の端っこで息を整えた。

お父さんは逃げたかな――――――――――――――――――――――……。

「よし、行くか！！！！！！！！」

私は行こうとした瞬間、私よりはるかに小さい子どもが私と同じように小さな手提げ袋を持って必死に階段を駆け下りてる姿が見えた。
私はそっとその子に駆け寄る。

「上、どうしたの！？」
もちろんその動作は駆け下りながら。
「テロ！！！！！！！って大人のたちが言ってた！」

テ……ロ？

日常でその言葉を聞く機会なんてないこの平和な社会で――――――――――――。
一気に非現実的になった。

「大丈夫？私が負ぶってあげるから！」

そういってその男の子を抱える。
軽いけどもちろんペースダウンする。でも、目の前で殺されるのとか…見られないし。
テロ集団だったら攻めてくるし……。

やっと一階についたぁ……。
みんな外に非難している。外はどうやら爆撃されたらしい。こんな大都市の真ん中で爆撃テロなんてイヤだ……。
「あ、袋――――――――――――――」
その子がポツリとつぶやいた。
「え、袋！？」
「おいてきちゃった……。お母さんの……形見…なのに――――――――――――――」
か、形見！？

それじゃあとりに行かなきゃじゃん！

「お姉ちゃんが取ってきてあげるから、あんたはここにいてね！」

私は近くにいたサラリーマン見たいな人にその子を預け階段を駆け上る。

六階の踊り場！！！！！

私があの子を抱えた場所。そこにある！！！！！！！

すれ違う消防士が

「帰ってください！！！！！！危ないです！！！！！！！」

と叫ぶ。私はそのたびに塞ぐ道を突破して駆け上った。

まだ、ところどころで爆発が起きているらしい。

六階についた――――――――――――――――――――。

私はあの子の手提げ袋を取ると階段を下る。煙で体が異常反応している。それに息が持たない。

そのとき――――――――――――――――――――。

ドンッ

体が吹っ飛ぶ。
すごい体が痛い。
あぁ、そうか。六階で爆発、あったんだ――――――――――――――。
そのまま私は意識を失った。

沙菜はその手にしっかりと男の子の手提げ袋を持ち焼死体で発見さ

れた。
テレビなどの放送機関で男の子は発見された。
ちゃんと、その子のお母さんの形見は残っていた――――――――――――無傷で。
テレビでその男の子と男の子の父が映ったのを沙菜の両親はそっと見ている。
沙菜のお父さんは幸運なことに、助かっていた。多少傷はあるものの病院の治療で治るくらいだ。
「お姉ちゃんは？」
その問いに、そのアナウンサーも何も答えない。
「まぁ、そのお姉ちゃんもこれを見てるから感謝しなさい、祐二」
祐二、それが男の子の名前。
「うんッ！！！！お姉ちゃん、ありがとー」

その後祐二のお父さんだけが映る。
「申し訳なかった――――――――――――――――それとありがとう。菜王のためにありがとう。祐二のために自分の命を犠牲にしてくれた沙菜さんに
永遠に感謝をする。本当にありがとう」
菜王というのは、祐二のお母さん――――――――――――――――――――。
「……本当にありがとう」
その言葉がリビングに響いた。

適者生存編（後書き）

終わり方微妙ですねー…

手枷足枷編（前書き）

裕也乱心編です。
乃麻過去が含まれているのでかなりシリアスな感じだと思います…

手枷足枷編

お姉ちゃんと過ごしたあの想いでは

忘れたくても忘れられない、酷く、優しい想いでだよ――――――――。

「夏だー！！！海だー！！！！」
檸檬が叫ぶ。
その部屋にいた、乃麻を除く全員がまぶしい笑顔を檸檬に向けた。
檸檬当人もまぶしい笑顔を向けている。
「……何？海行きたい、言うてんの？」
乃麻が面倒くさそうにぼそりと呟いた。
「じゃあ、明日海だぁ！！！！！」
「アリス学園出ていいとでも？」
「俺が許可する！」
「岬先生？」
乃麻の邪眼で見られて恐縮する岬先生。
「よーし、明日は海だー！！！！！」
「私行かないから」

その場が一瞬凍った。
「な、何言ってんだよ！おいＰ！」
「ライムは黙ってて。私は行かない」
ツーンとした言い方にさすがのライムもムカッときた。
「…じゃああのばつゲーム復活だぞ？」

ばつゲーム、と聞いて乃麻が固まる。
「し、仕方ないな～行くよ～」
不本意だ、という風に顔をしかめながら乃麻が言う。

「海、海、海、海、海――――――

◇

「あれ、ライムは泳がないの？」
昼食をしよう、ということであがってきた三人が寝ている乃麻をよそにライムに聞く。
ライムは読んでいた本をパタンと閉めて笑顔をで言う。
「あぁ。こいつを見張ってなきゃいけないしな」
そういって乃麻をさした。
「ったく。その言葉Pが聞いたら怒るよ」
檸檬が腰に手を当ててため息をこぼす。後ろにいる二人は軽く笑っている。
「…っと。こいつ起こすか」
そういってライムが乃麻の体を揺さぶる。
そのとき…――――――――――。

フワッ

乃麻がかけていたパーカーが風で浮く。
そして…。
乃麻の背中が明らかとなった。

「こ、これ――――――――――――――――――」

檸檬が一瞬目を当てた後怖くて目を伏せる。
檸檬を除く3人は恐々見ている。

そう、乃麻の背中には生々しい傷がくっきりと残っていた。
タバコを長く押し付けられた焦げ目や、何回も同じ場所を切りつけられたと思われる場所…。
しかも、切りつけられた場所は、大きくばつを描いていた。生々しいその傷は昔虐待を受けていた頃のままのだろう。

「……ん？」
そのとき運悪く乃麻が起きて、羽織っていたパーカーがないことに気づく。
そしてハッとしたようにパーカーを探す。
「な、何でパーカー…！？」
そして自分の腕を隠す。
その動作に腕にもあることをしった4人はとっさに腕を見る。
そこにもきりつけられた後が数箇所見えた。

「これは…」
口ごもる乃麻の理由――――――――――――…それは、家庭虐待を受けていたから。

それを知っていてなおかつ今ココにいる人は、ライムと檸檬のみ。
ライムは乃麻と比べるととても軽い虐待を受けていた。
そしてそっとライムが自分の羽織っていたジャケットを乃麻にかける。
「ありがと…」
そういって乃麻はジャケットを着る。

「ちょっといいか？」

ライムは檸檬と乃麻をパラソルの下に残し、二人を連れて海岸の端へと歩んだ。

繋風捕影編（前書き）

すごい生い立ちなんですよー。直樹君は

繋風捕影編

――――――――――――――――――――さぁ、わすれよう。

このような、罪と罰に埋もれたこの世界を。

「やめて！！！！！！！」
防音ガラス、毎日閉めているカーテン…。
響くナイフの音。暴れる両親。逃げる子供。こんな生活がイヤだとしか思えない子供たち。
酷く傷ついた体。酒乱、ヘビースモーカーな本当の父親ではない父親。
虐待を受けているという事は、世間には知らされていない。
小学校にも通えない。外出なんかいけない。
でもまれに私だけ母親が連れ出してくれた。傷を隠して、祖母の家やおばさんの家に行った。
小学校で私の存在はなかった。でも。それ以上に、裕也の存在はなかった――――――――――――――――――――。
途中で私だけおばさんの家に預けられた。
ものすごく可愛がってくれて、傷も深い傷だけ残るだけ。暴力も虐待も受けないで、好きなことできて…。
ちゃんとご飯食べられて、お風呂も入れた。
だからこそ、その幸福を裕也に味わってもらいたくて私はおばさんの止める手を振り切り家に帰った。
おばさんに、裕也も可愛がってくれる？って聞いたらおばさんはニッコリ笑って、もちろん、って言ったから直樹を
預けられる。
家に帰った私に、母親は驚きを隠せずに目を丸くして、裕也は悲し

いような嬉しいような目を向けた。
父親は――――――――――――――――輝かしい目を向けた。
また、獲物が戻ってきたよ、とでもいうように。
小2のころ小1の裕也と必死の思いで家から脱出しておばさんの家に行った。
私がおばさんの家に行くと、両親――――――――――――――――
鬼にバレてしまうから私はおばさんに裕也を託し
遠い所へと旅立った。
その途中で檸檬に逢った……。

「……乃麻？」
檸檬が顔をのぞいてくる。私はそっとその目をそらす。
目の前にあるはずの青い綺麗な海が赤い醜い海に見える。コレは幻覚だと自分自身に暗示をかける。
多分今ライムはあの二人に私の歪んだ過去を話しているのだろう。
まだ体が痛い。あの頃を思い返すといつもなぜか痛くなる。ずっと長く痛めつけるこの傷
時々思う。この傷は外見的な傷？それとも精神的な傷？

「乃、麻？」
「何？」
そっけない？
「なんか思ってるでしょ」
「別に」
素気ない。これが、本当の私。親の愛情を受けずに育ってきた者の醜い本性。お城でたくさんの召使達に
囲まれて過ごしてきた檸檬とは格が違いすぎる。
実際檸檬は庭にも出ない。庭に出て転んで擦りむくといけないから。
私なんて、違う意味で出れない。だって、人様に傷だらけの姿を見せることは親にとって恥ずかしい事だからだと鬼がよく呟いていた。
そんな理由、通用すると思うの？この傷はあんたたち鬼がつけた傷。
虐待はいつの時代でもある。
小学生で私は自分がこの世に存在することが変だと考えていた事あいつらは思ってもいないだろう。
何で私なの？何で私が虐待を受けなきゃいけないの？寝るのが怖かった、寝ている間に殺されるかも知れないから。
前は目を開けたら首を絞められていた。息が出来なかった。
「おーい、そこの姉ちゃん」
檸檬をナンパしようと人が集まる。
「……ちょっと追い払ってくる」
「行ってらっしゃい」
すぐにナンパされてる檸檬を横目でチラリと見た後すぐに海へ戻す。
そして…。
「いやぁ――――――

私を迎えに着たんだ。私を殺しに着たんだ…。イヤだ、死にたくない！！！！！イヤ……。
まっすぐと私を睨むその目はいつのときも変わらぬ目。
手に持ったナイフが暴れたそうにしている。
「お父様、やめて！！！！！」
必死に逃げるけど頭を掴まれて投げ飛ばされる。昔も…コレで箪笥の角にぶつかって頭から血出たっけ。
運良く私は砂に着地。
「Pッ！！！！！」
ラ…イム？
「着ちゃダメ！！！殺される！！！！」
私は鬼の前に立ちはだかるライムの前に立つ。
「逃げて！！！！殺される！！！！！」
守らなきゃいけないものがある。
今後ろにいるのは裕也じゃないけれど、守らなければいけない。耐えた先にあるのが未来なのだから。
「いやぁ…」
振りかぶったそのナイフを直に腕に受ける。

ドパァ

って血がとんだ。鬼は何度もその場所を切りつける。痛いけど、ココで弱音を吐いたら負け。
耐えなくちゃいけない。この鬼に――――――――――――――――――――。
鬼は深くなった傷に満足するともう片方の傷が深く残っている場所を切りつけた。
「やめてくださいッ、お父様！！！」
叫ぶけどもはや昔も今も届かぬその声。

だけど今日は違った…。
ライムが守ってくれた――――――――――――――――――――。
さすがに鬼もライムには手出ししなかった。
腕が血まみれ。
そんな腕の痛みもこらえて私はライムに駆け寄った。
「大丈夫？」
感情がこもってるかは分からないけど、守ってくれた事に感謝する。
「それ俺の台詞。お前、幻覚で攻撃されてたんだぞ？」

ゲンカク？

「いきなり、叫ぶしそしたらいきなり血が飛ぶし…。見てる側としてはほんとに…」
「幻覚じゃない！！！

檸檬の後を追ってきた岬先生がそっと呟いた。
「精神状態、ぼろぼろだなぁ」

ワタシハスグニニュウインシタ、セイシンカニ

「お姉ちゃん？」

何日経っただろう。私は懐かしいあの声を耳にした。近くにいた先輩が驚いて声の主を見た。
「ゆ…裕也？」
私が両手両足を縛られた状態の中呟いた。
「お姉ちゃん…」
実はココ、アリス学園ないにある病院。
「裕也…無事だった？」
私の目に涙が伝った。裕也生きている――――――

九腸寸断編（前書き）

前々から分かってると思いますが、
乃麻視点です

九腸寸断編

幼き子どもの心は凶器――――――――――。
幼少時代の話がすべての鍵――――――――――。

夜、呼吸困難に陥り不意に目を開けた。
目の前には興奮気味の鬼……。その鬼が私の首を絞めていた。前にも……前にもこういうことがあった。
苦しくて目を開けたら首を絞められていた――――――――――――――――でも裕也は何度も経験したこと。
「苦し…」
私が痛さにうまく操れぬ声を、必死に絞り出して発した。
「ちッ。起きたのかよ」
鬼はそっと私の首を解放した。あれ、なんだか変だ。調子が狂う。
いつもはこんな簡単に諦めることはなかった。

とりあえず呼吸を整える。そして安堵感に満ち溢れていたところ、鬼は刃物を取り出した。
あぁ、何？殺されるの？何度も経験していることよ――――――――――…。

ザクッ

その音が病室に響く。飛び散る血。
激痛が腕に走る。あぁ。腕をやられたのか。
「……さま…。お父様、やめて下さい」
私は必死に叫ぶ。無理だと分かっていても、先の未来を見てみたくて私は声を振り絞る。
「うらぁ――――――――――――！！！

「…無理はするなよ」
「うん……」
なんてライム様はお優しいの！！！どっかの誰かさんに分けてあげたいくらいだよ、優しさを。
でも、こうしているのに何にもできぬ悔しさというか申し訳なさというか…。
「いつもならゲームしてるのにね」
私が悲しみの笑みをするとライムはニコリと笑った。
「あぁ。またやろうぜ！俺うまくなったんだからな！」
あ、抜け駆けだ。
人がゲームできないで苦しんでいるときにライムはちゃっかりとレベルアップってところですか。
卑怯～！！！
「そうそう。裕也見かけた？」
私が答えると首をひねるライム。
「裕也って彼氏？」
え、それ禁断恋愛じゃん。それに裕也がすきなの、檸檬だし。
「弟だよッ。マイブラザ～？」
「へ～。お前に似てるのか？」
傷は似てるよ。こんなこと言えるはずがない。
「聞いてよー！！！」
私がいきなりおおきなこえをだしたものだからライムが驚愕した。
「な、何だよ」
「あのね、裕也実際は小6なのに、中2なんだよー！！飛び級だって！むかつくよねー」
本当にむかつく！何で私より年上になってるのよ！それに、中2って言ったら…。
「まぁまぁ。落ち着け落ち着け。中2だったら俺と同い年か」
「精神年齢に違いがあるけどね」
うん。

あいつは精神年齢低…いか？
うーん。よくあの虐待に何も疑問も抱かずに…。
ヤッテコレタヨナ
「…にしても、いつになったらはずせる……P？」
ナンデワタシタチガギャクタイヲウケナキャイケナイノ？
コノテニモモッタキョウキナラダレデモヒトヲコロセルジャナイ？
ナンデナンデワタシタチナノ？
「やめろー！！！！！！！！！！」
…！

はっとして私は目を開けた。
目の前には血まみれのライムの姿。
「キャァ――――――――――！！！！！！！！！！

「んで、先輩は？」
私が聞くと首を横に振る檸檬。
残念。
「まぁ、平気だよ」
何が平気か分かりませんよ、檸檬さん。
「んで、ライム先輩は？」
「今手術中。何か想像以上に様態が悪いらしいの～。いったい誰の仕業なんだぁ？」
何でライムがわざわざ攻撃されなきゃいけないわけ？やっぱり鬼のせい？
ヤダ…。私と裕也以外にも手出ししてきてる。しかも親密な人に――――――

すい人。
「れ、れ、檸檬さん！」
その声が震えているのは気にしないであげておこう。
「ん？何？」
檸檬スマイル炸裂に完全にやられてますね。
「あ…あの！！」
「檸檬、呼んでる。行ってきな」
私は裕也の恋を応援しよう。あ、でもCが檸檬のこと好きなんだっけ？まぁ、仕方ないよ。ドンマイ、C。
「さて――――――――」
そっと呟いた。
後何分で事件が起こるのかな？
もしこれが前体験した…一回だけしか体験していないあの世界…だとしたら。私はあれをやらなければいけない。
勇気を出せ、瀬綿乃麻！！！

「キャ――！！！！！！！」

あ、悲鳴。
これが合図だよ。私はそっと手足にかかっている鉄の輪っかを無理やり解き放った。
そして、私は病室を飛び出す。力を入れすぎたのかドアが壊れる。
コノ後の大火事のモトだから私は卑怯だけど魔法を使って消す。

そっと手術室へ向かった。ライムは手術放棄をさせられていた。あぁ、コノ前助けられなかった命。
今助けるから。
私はそっと完治させて手をとった。
「行こう」
「……？」
わけも分かっていないライムの手を強く握り締めて屋上まで走る。
途中から暑くなってくる。
そして窓から下を見るとすでに中庭に人が集まっている。
「火事？」
「そうだよ。早く逃げよ」
走り出すとライムのほうが早い。
「お願い、屋上行って」
怖い怖い怖い…。この前みたいな死に方はいやだ！
すぐに屋上へ付く。
数人の生徒が集まっている。制服を見れば高校生もいれば初等部もいる。
「逃げたいでしょう？」
私はそっと聞くとみんなこくんと頷く。
そっと手を太陽にかざすそして安全地帯へとワープさせた。ここまではこの前と同じ。
次……かぁ。
殺すか、殺されるかの二択しか残っていない。
本当に神様は意地悪だよね。
殺されるのは慣れているわけじゃない。慣れられるものでもない。
苦痛と悲しみに埋もれて死んでゆく。
それがイヤなんだ。
「お姉ちゃん？降りてこなきゃ、死んじゃうよ？」
炎で学園を焼こうとしている張本人――――――――瀬綿裕也が下で叫ぶ。

その目はもうすでに死人のように何も写していない。隣にいる人質となっている檸檬の存在が気になる。
「だから？檸檬を返して！」
だけど私と同じ。何も返答をしない。
「イヤだ」
その一言だけを言う。
「好きな人をそうやって勝手に……勝手に自分のものにするなんて間違ってる！！！」
叫ぶけど睨まれて返される。
「おかしい！！！裕也変だよ！」
叫ぶけど伝わらなくて、もどかしい気持ちがずっと心を取り巻いている。
裕也の心が閉ざされた理由なんて知らない。だけど……だけどあの時二人きりにしたのが間違いだったんだ！
「おかしい……変だよ、変だよ裕也！！それじゃあ――――――――」
言葉を切るとさっきまで泳いでいた裕也の目が正確に私を見る。
「それじゃあ、お父様と同じ！！！！」
その言葉にさすがにキレた裕也が先端に炎をつけた弓を飛ばしてくる。この前は…これで屋上が焼けた。
そんなこと鳳凰としての威厳にかけてやらない！
「炎は私の属性。無理よ！」
魔力の消耗が激しいから使ったことが少ない業を繰り広げる。
もちろんすべて飛んできた弓を回避。
腕が疲れたのか弓を飛ばしてこない裕也を見て私は魔法を解いた。
「檸檬を返して――――――――――！！！！！」
疲れたことをミラージュしながら私は叫ぶ。
ミラージュがばれたのか小さくため息を付く様子を見せる裕也に怒りを覚える。
「人質、返すよ」

「……え？」
檸檬を囲っていた魔法の牢屋が放たれる。
「マジで？」
この世界で檸檬を解いた裕也は初めて。ちょっと初めての展開に興奮している自分と怖がっている自分がいる。
反省したの？それとも未来を予測したの？
「その代わり――――――――」
か、代わり？
「お姉ちゃんの好きな人は？」
その声に驚愕。何で小６でそんなこと聞くの？家族にそんなこと言うはずないじゃん。
檸檬がこっちを見る視線が気になる。
「あ、後ろ！！！！！」
下から叫ぶ少女の声で私は後ろを振り返った。

後ろに炎があった。気が付くと暑くて、どうしようもなく暑い。何で気が付かなかったの？
バカだ…。でももう魔力なんか使えない。
「好きな人、言えば救ってやるよ」
好きな人が犠牲になることくらい分かってる。見え透いた戦略で行くなんて――――――――。
「誰もいない！！！」
そう叫ぶ。コレが一番無難だろう。
「はぁ？だったらみんな焼いてやる！」
ヤ、ヤダ！！！
「やめて！！！」
そういうけど内心みんな焼かれたら自分は焼かれないっていう自信があった。
だけどいい加減なことはできない。
「じゃあ、好きな、人は――――――――？」

だ、誰にすればいいの？
イヤだ、イヤだ、イヤだ、イヤだ！！！
誰も犠牲になんてしたくない！！！！！
…待てよ。あの人なら協力してくれるんじゃないか？
迫り来る炎に恐怖を感じながら私は大きな声で叫んだ。
「湊！！！！！！！！！！！」
その声に過敏に反応しまくるライム。ゴメンね…ゴメンねライム。
「嘘！！！！！！」
……ハイ？
「本当にすきなのは――――――――――」
ヤダヤダヤダ！
違う、違う、違う！！！
「安藤翼」
その言葉を聞いたときに血の気が引くのが自分自身で分かった。

哀鴻遍野編

――――――――少しでいい。
少しでいいからあなたの心のどこかに私がいてください。

「コレが正解」
呟くような裕也の声もはっきり…はっきりと私の耳に届く。
背後にじりじり迫ってくる炎なんかも関係なかった。
「何とか言えよ」
その言葉は妙に強く、はっきり心に刺さった。
「お父様と同じ」
私は思った事を口にせずただ、相手をなだめる事もせずに攻撃ばかりしている自分が少々気に食わない。
「はぁ？」
思った通りの返答に安心。これなら攻撃できる。本当はしたくない。でもここまでいったんだったら仕方な――――――――――――――――――。

タテモノガカタムイタ

思いっきり私は、後ろの炎に向かって落ちていった。
羽根など出す暇もない。

「いった……」
気がつくと、炎に囲まれていた。そして立つと頭が朦朧とする。
頬を伝るのが涙じゃなくて血だから恐らく頭から落ちたんだろう。
頭部打撃によって意識が朦朧とする中私は炎の中を突破した。突破しなければ……あのままあの場所にいたら
本当に無力な私になってしまうから。
「へぇ…。その炎を脱せられるだけの体力はまだあるってことか」
呟く裕也は本当に父親そっくりで、あの時殺されてしまえばよかったのにと言う酷い考えが私の脳裏をよぎった。
「助けてやるよ」
その声にかすかな希望の光が差し込む。
「…へぇ。あんたにしては珍しいじゃん」
考え方が歪んでしまった私たち。どこまで歪んでいるのか分からな

いけど私以上に裕也のほうが歪んでいる。
アレだけ酷い仕打ちを受ければ歪んでしまうだろう。
「お姉ちゃんの一番好きな人を殺すなら」
その言葉をかみ締める。
何で？何でそうなるの？
「そうすればみんな救ってやって学園も元に戻す。もしこの条件を飲まなかったらみんな焼き殺す」
裕也の背後にいる檸檬とかさっき助けた女の子とかみんなが私のほうを見て言葉を発するのを待っている。
助けて、とこぼす事は出来なくてもこうやって助けを待っているのだろう。
ゴメン…。
私は馬鹿だから。バカだから好きな人を殺すなんて酷い事見てられません。
たとえみんなを殺しても好きな人だけは殺せない。
「バッカだなぁ。私がそんなバカな考えに乗るとでも？」
次の言葉に期待してるのかみんないっせいにこっちを見た。
「私は――――――――――――――――みんなを助ける」
そういったときの裕也の目は炎のように赤く。いつもは青い綺麗な目がはっきりと私のように赤く歪んだ。
「みんなを、助けるだと？」
その声が前に父親に投げかけられた、
「裕也を助けるだと？」
という忌々しい言い方にそっくりで裕也が変わってしまったことに悔やむ。
「あんたは違うの？檸檬を殺すのと、檸檬を生きさせるの。どっち選ぶのよ！！」
「もちろん、最初の」
それを聴いたときの檸檬の表情が凍る。
「お姉ちゃんは馬鹿だね。たった一人が犠牲になればいいのに――

――――――――――――。わざわざみんなを殺すんだもん」
殺すわけじゃない…。
この手で人を殺しても、私は再生してる。裕也とは違う。
「バイバイ。お姉ちゃん」
その声とともに意識が遠のく。
最後に見えたのは悲しげに俯く檸檬の姿だった。

「……痛」
目が覚める。
あぁ、私は未だ生きていたのか。
――――――――――――十字架？
目をはっきりと開ければ一人ずつ頭からハンマーで殴り殺している裕也の姿が目に入る。
一人、また一人。
みんな手を縛れて抵抗する事が出来ていない。未だ希望を捨ててくれていない子が私の目に入る。
こっちを一身に見つめて、助けて、と言っていた。
……それにしても十字架っていうのはキツい。裕也はクリスチャンじゃないはずだけど。
「あ、お目覚め？」
その声に不快感を覚える。
「何？あんたの好きな人まだ殺ってないから」
私は今ここで新世界にいけることも可能。でも…でも。まだ可能性

があるかもしれない。
「本当に？嘘だったら焼くよ。この世界」
その言葉に裕也が驚愕。
「は、俺と同じじゃん」
同じだ、なんて程の侮辱の言葉はないと思う。
「アハハハハハ。馬鹿だなー！！私はね、先輩がいるから生きてるの。先輩がいなきゃ生きる意味がないでしょ？
だから、みんながいなくてもいい」
私の高らかな笑い声と、最後の言葉にみんなの顔が青ざめた。
きっと多分、血ィ繋がってる兄弟だから――――――――――――――――とでも思ってるんじゃないかな。
流れる血がじわじわと私の服の模様となる。
「じゃあ、裕也はどうする気？」
「焼き殺すって言っただろ」
考え方を変えない頑固な人だ。
「へぇ」
「じゃあ俺作業の続きだから」
はぁ？何が作業？私が手出しできなくなって安心してるようにも見える。
目の前で人の血がかかるって言うのはつらい。
殺される瞬間私を見た人は必ず目に『裏切り』の言葉が浮かんでいて……。
耐えられないよ……。つらいよ。
「……乃麻？」
そっと檸檬が来てくれる。その目に涙が浮かんでいてなぜだかは理由が分かった。
「岬先生が殺された」
その言葉がグサりと心に突き刺さる。
岬先生…？
「何で…何で助けてくれなかったの」

そんなこと言わないでよ。
「ヤダよ！！！！！！！助けて！！この人殺し！！！！！」
ヒ……トゴロシ――――――

人殺しだよ、アハハ…。
「乃麻！！！！あんた倒れる！！！」
「ほら、裕也のバカぁー！！！！アハハハハ！！！」
檸檬が後ろで支える体制になってる。
「先輩、やったよ私やったよ！！！！！！！！」
あ……。
なんか体が重いよ。痛いよ。頭が痛いよ。

フッ

気がつくとしゃがんでいて。
空が遠く見えた。
手を伸ばすと檸檬の手に当たって檸檬は少々笑っていた。
「バカ…」

だんだん空が遠くなって最後に見えたのは先輩で、その顔に笑顔が見えていなくて……。
私が最後に言った言葉は、
「安藤先輩、笑って？」

哀鴻遍野編（後書き）

裕也乱心編やっと終わりです…。
正直言えばどっちが乱心してんのか作者も分かりません…
多分一番暴れたのは乃麻じゃないでしょうか？

剛毅果断編

さようなら

儚く悲しい絶望と悲しみに打ちひしがれたこの世界よ――――――

――――

「アリス先輩ー……」
後ろからかけてくる後輩が私の名前を呼ぶ。
なぜか彼女は学校以外でも私のことを、アリスと呼ばずに先輩をつけて呼ぶ。
ちょっと疑問。職場にいるときくらい名前呼びでもいいんではないか、とは思うんだけど…。
彼女にそれを聞いたところ、
――――――――――佐藤先輩から先輩はどこでも先輩だといわれました
といわれたらしい。確かに佐藤先輩は怖い。
「アリス先輩…？」
後ろから声が心配そうに私を呼び覚ませる。
「……何～？」
私が振り返り笑みを向ければ彼女の顔は明るくなる。でもその顔とは裏腹に服がとても恐ろしい。
鼻をつんと突くあの臭いが彼女からにおってくる。
思わず鼻をつまむと彼女はあわてたように話し出した。
「ごめんなさい！先輩はお掃除嫌いでしたよね…」
一般的に聴けば最悪な話である。
しかし、彼女のお掃除と言うのは――――――――――。
「いや、人殺しは…ちょっと」
彼女が羽織っていた夏っぽい綺麗な水色のパーカーは真っ赤な血で

染められていた。
どうやったらここまで血がかかるのだろうか。
「人殺し？悪を倒すのに手段は選ばないんですけれど」
その言葉に恐怖という文字を脳内で当てはめる。
「で、でも人の命は大切だし…」
「何でですか？」
コレは演技じゃない。心底不思議な感じに私を見ている。
「だって再生できないから――――――――」
そう答えれば彼女はまた首をかしげる。
「先輩は、虫が嫌いですよね？蚊が飛んでいたら潰しますよね？再生できぬ命を潰していますけど…」
確かにそうだ。
でも……でも命は大切なんだ。
簡単になんて説明もつかぬような……。

誰でもいいからこの後輩を止めて！！！

「誰だっけそれくれたの？」
本当に前に小さかった彼女は笑顔で話してくれた。大鎌のことを――――――――――。
「先輩がくれたんです」
そうやって笑う彼女は小さくはにかんだ。
いつもは無表情で人とかかわりを持つのを憎み、悲しみの瞳をしている彼女が笑うとなんだか違和感がある。
あの抑揚のない話し方ではなくちゃんと言葉に意味がこもっていた。
「先輩…かぁ」
「アリス先輩と同じ中学二年生の先輩なのですよ」
中2だとはいっても今年先輩になったばかり。
まだまだその言葉は口から発する言葉であり耳で聞き取る言葉ではないと思う。
でも仕切りに先輩、と呼ぶ彼女によって、なんとなくなれてきたかもしれない。
「あってみたいなー」
そういうと彼女の顔が一瞬曇った。
本当に一瞬だけ――――――――――――――。
「…そうですね。逢いたいですね」
そして彼女は羽織っていたパーカーの染み抜きをする。
あの臭いも風とともに消えていった。
「逢えないの？」
聴いてはいけない事だと分かっていたが好奇心がその気持ちよりも大きく思わず聴いてしまった。
「はい。ちょっと今回はややこしいので」
何がややこしいのかは分からない。だけどこれ以上は詮索してはいけないんだ。
知られたくない事は人にある。
「……もうすぐ秋ですね」
その声が寂しく聞こえるのは私だけ？

「未だ夏になったばかりじゃない」
そう笑うと彼女も小さく微笑んだ。
「そうかも――――――――しれませんね。あ、先輩…秋にはちゃんとYの隣にいて下さいね」
そういうと彼女は私の横をすり抜けて自室へ行った。

「…何――――――――――?」

呟く私の声は疑問と言う言葉がこもっていた。
そして私は体感する事になる

彼女の言っていた、秋の出来事を――――――――。

邂逅相遇編（前書き）

ちょっと休憩
昔に戻ってみましょうか

邂逅相遇編

陽だまりはいつまでも心の中に――――――――――――――――――――。

「痛ッ！！お父さん痛いよう、痛いー…」
「うるせぇ！！！だまれ、ぼけ！！！」
その声が響くリビングの一角。小さな男の子が膝を折りうずくまっていた。血にまみれるその姿を今もなお
青年は鋭い刃のナイフで切りつける。
幸い、奥に食い込むまではいっておらず男の子の灯火は続いていた。
時折叫ぶその声がとても惨めに感じられる。
「やめて！！！！！！！！！」
力なく叫ぶ小さな女の子がリビング外に通じるドアに所に身を任せて、男の子よりも血にまみれた姿で立っていた。
青年はその女の子を見て口元が上がる。そして、男の子は恐怖を瞳に宿す。
「いい度胸じゃ。こっち来いやぁ！！！」
何かにつかまっていなきゃ歩けないほどよろよろとした足取りで青年のところへと向かう。ナイフが暴れたそうに煌く。
男の子は女の子をとめようと手で追い払うようなしぐさをするが女の子は笑顔を男の子に向ける。
「何が楽しいの？こんなことしてなに…」

女の子の講義の声は途中でさえぎられ後ろにかばった男の子に血がかかる。
痛そうにきりつけられた腕を押さえる女の子。その抑えている片腕さえも斬りつける青年。その行為に仕方なく
抑えている腕を外す。男の子のときよりも傷は数倍も深く今もなお血が滴り痛さが感じられる。
青年は面白そうに片頬を上げる。
意地悪そうに微笑んで、同じ場所を数度きりつける。痛そうに顔をしかめる女の子と後ろにかばわれた男の子。
「なんか言えや！」
面倒くさそうにはき捨てる。女の子は首を小さく横に振る。
「ったく、早う死ねや！」
ナイフをおもむろに投げだし屋外にでる父親。その姿が窓の外から見えなくなると男の子は女の子にかけより
顔についた血をぬぐう。
「お姉ちゃん…お姉ちゃん…」
おびえながら涙を流す男の子。目を閉じたまま動かぬ女の子の頬を強く打つ。
その行為が数分続くとつらそうに女の子の目がうっすら開く。その様子を見て安堵のため息を出す男の子。
「もう僕大丈夫だから。お姉ちゃん、もうやめて」
小さいのに、傷が腕に残っている。一生治る事はないだろう。
「大丈夫。小さい頃は守ってもらわなきゃいけないの」
小さな手で男の子の頭をなでる。
「普通の子は守るのが保護者って言う人なんだってさ」
そういって笑う女の子。

「……？」
女の子が目を小さく開ける。妙に体の上が重い。上半身を起こせば驚く事がおきていたのだ。
「毛布！！！」
感嘆の声に召使らしき人が来る。
「おはようございます」
――――――――――――――お母さん…の妹の家か
女の子は小さくため息をつく。普通虐待を受けている子が家を離れると嬉しいところだ。しかし女の子は嬉しさなどいう気持ちは全くなかった。
男の子のことが心配で心配でならなかったのだ。
しばらくベッドの上で呆然としていると女性が来た。
「ほら、早く着替えなさい」
服を優しく差し出されて渋々受け取る。顔に出たのか女性は小さく呟くように言う。
「大丈夫。今日あいつは出勤だから」
出勤と言う言葉を聴いて女の子の顔が緩む。自然にこぼれてくる笑み。
「ほら、子供らしく公園で遊んできなさい」
その声に笑顔で首を縦に振って腕を隠す長袖の服を着る。
「いってきまーす！！！！！！！！」
豪邸といっていいほどの家の中を走って外へ出る。
久しぶりの靴。

◇

気持ちい風が私の髪の間を縫って抜ける。ロングの髪の毛が鮮やか

に揺られた。
着用している服から、あの生臭い血の臭いがしないのが不思議だった。
回りでは楽しそうに遊ぶ同年代くらいの子。混ざりたいけれど混ざれない。複雑だな…。
俯いていると誰かが近づいてくるのが気配で分かる。
「一緒に遊ぼう」
顔を上げれば同じくらいの年の男の子がいる。
「…うん！」
彼は先に行ってしまう。私はそれを追おうとして走ろうとしたが足が痛みこけた。
すると私の大袈裟な転びに驚き手を差し伸べてくれる。
「大丈夫？足痛そう」
「大丈夫。こんなのなれてるから」
その手につかまらずに私は立ち上がった。
「僕、楓っていうんだ」
「……名前なんていいたくない。年は5歳」
私がそう答えると彼は考えていた。
「乃麻ちゃんは？名前！！僕、『麻』っていう字好きだし『乃』は僕の妹の名前についてるし！ね、乃麻ちゃん！」
乃……麻？
「僕6歳なんだ！乃麻ちゃんより年上だよ！」
乃麻……実感わかないけどこの人なら信じられるような気がした。
「乃麻ちゃん？」
数歩前に出て手を差し出す彼の手につかまる。
「か……楓おにいちゃん！！！！！！！」

あの日、この人に逢えなかったらどうなったんだろう。
多分これは運命なんじゃないかな。

「ほら、乃麻行くぞ！！」
乃麻の前に出て手を差し伸べる楓。
「楓先輩…待ってください」

この関係は今もなお、ずっとずっと続いていたり……♪

青天霹靂編（前書き）

遅くなってすみません…

青天霹靂編

その笑みにだまされちゃ、イヤだよ――――――――――――――――――――。

「おーっす、乃麻！」
その声で振り返ると笑顔の彼がいる。
でも大きく違うのが…。
「せ、んぱい？」
「ん？どうした」
制服。
私の知ってる先輩は中等部の制服を着ていた。いや、実際中２なんだからそうだろう。
でも今の先輩は確実に、高校生の制服を着ている。しかもカナリ身長伸びてるし――――――――――――――――――――。
「…先輩、私の学年覚えてます？」
「中１だろ」
その声に酷い絶望を覚える。
私は気が付くと走り出していた。

「湊――――――――――――」
彼の部屋にずかずか入いる。無論彼はいつものように宿題をしている。
ノックもせずに入ってきた私に目を丸くする。
「な、乃、乃麻！？」
その声に安心し彼のベッドに腰を下ろす。いつものようにどんどんその中へ吸い込まれてゆく。
「湊の年齢は？学年は？」
「な、何だよ。中１に決まってるだろ」
その声に安堵のため息がこぼれて自然に頬が緩む。
「そっかぁ…。私の中１だよね？」
「当たり前だろ。熱でもあんのかよ」
そういって私の隣に腰を下ろし、心配そうな顔してくれる湊。
「何？心配してくれんの？」
「な、別にそんな意味じゃ…」
「ありがと。嬉しいよ。惚れちゃうかも…」
そういって笑えば顔を真っ赤にする彼がいて毎日が楽しい…。そう、これが本当に幸せだと思う。
「こういうのが幸せなんだね…」
「――――――――――――え？」
一緒に笑ってくれる人がいる。こんな私でも隣にいてくれる人がいる。こんな幸せないよ。
人殺し扱いされない、みんなが笑顔なんだ…。
「私は、こうやって湊の隣で笑っていられるのが幸せだと思うんだけど…変だよね」
「…それって――――――――――――」
真剣な目でこっちを見られて思わず鼓動が早くなる。落ち着け…落ち着け自分。

「別にそんな恋愛系の意味じゃないよ～」
笑ってごまかすけど……。
今回の湊は手ごわい。
「…で？」
で、って言われても…何も答えることがないよ…。何？なんて答えればいいのか分からない。
「わ、分からないよ…なに言ってるのか」
顔を伏せれば思い切り肩をつかまれて正面を向かされる。どうしよう…。
「だから、俺はお前の…」
ヤダ…聞きたくない。聞きたくないよ！！！！！！
「あれ、何？入っちゃいけない雰囲気…？」
戸惑った様子で中に入ってきたアリス先輩がいる。
「アリス先輩ー！！！！！！！」
湊に一瞬隙ができたので私はそれをうまく利用して猛ダッシュで彼女の後ろに身を隠す。
「乃麻？」
「先輩～。怖かったー…」
アリス先輩は私の恩人だ。
「邪魔しちゃったよね？後でにしよっか？」
本気でそれを言っているのか？
「いや、全然平気です。むしろここにいてください」
私が無感情な声で言うと彼女は軽く笑って
「何？夫婦喧嘩？」
というので私は即座に否定。いくら先輩だからって言っていいことと悪いことくらいある。後輩として阻止しなければいけぬことだってある。
「で、先輩湊に用があるんですよね？告白ですか？私邪魔ですよね。ではさようなら」
私が棒読みで出て行こうとすればアリス先輩は私の手首をつかむ。

「ううん。湊んとこくれば乃麻がいると思って！」
え、先輩それ危ない発言じゃありませんか？
「で、用って？」
湊の不機嫌そうな声でアリス先輩が驚く。
「さっき言ったことの意味がよく分からなくて――――――――――――――――」
…あぁ。そういうことか。
「先輩はYのことが好きなんですよね？」
その言葉に頷くアリス先輩。
「だから悲劇を起こさぬようにYの隣にいてくださいということだけです」
「どうして…？」
物分りの悪い先輩だ。
「だって、一緒にいて嬉しいじゃないですか。好きな人と一緒に入れるのは幸せなことですよッ」
私が有無をいえぬ笑みを見せれば相手はその笑みに気づかぬ様子で笑う。
「そ…そうだよね！だから、毎日毎日乃麻は湊君のところにいるんだね！」
「違います！！！！！」
あまりに大声だったので自分自身驚く。
「あはは！大丈夫、みんな二人が相思相愛なこと知ってるから！」
「いえ、そんなことありません。私と相思相愛なんていう噂、湊が哀れですよ」
マジメな顔で言えば彼女を説得できる。
「そ…なの？うん、まぁ二人で話し合って。んじゃ、ありがと、乃麻！」
アリス先輩は案外早く部屋を出て行く。私もそれに便乗しようと思って部屋を出ようとしたら…。

「ちょっと待てよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7463d/

檸檬的空模様

2010年10月10日03時09分発行